Oct. 1892

女學雜誌

第三百二拾九號

甲の巻

明治二十五年十月八日發兌

注意

社説**王佐論及び惣理大臣**は政事家たるに切要する主質を論明し、堂々王佐の品格を説破して、大ひに吾黨の要求を告白し、兼て、支那廿二史中の人才に二種の性情あるとを論ずる所ろ、讀史家の一評を煩はすに足らん歟。**富山洞伏姫の一側の觀察**は透谷子が精明緻密の批評にて一名**處女の純潔**を論ずと題す、目下極めて忌はしき風評崎陽の邊に喧しきに當り試みに此一篇を取つて朗讀せば一種の清風自から來る心地せん。**本邦森林安固の度**は林學士齋藤乙作氏の論文にして極めて緻密、尤とも確實、當路の人未曾て謂はざるの新論にして本邦森林の爲に白氣を吐き、兼て森林と國風と大ひに關係するの新説を論出せり。**江藤新平**と南白遺稿と題する長文の批評は、佐賀の一奇才が衷情本領を明裁に露出し、其末路を憫みて其初年を盛んにするものなり。**大石良雄**の評も亦た青年の一讀を待つ。其他、人間の一大忘却は、社員某が病中に惑得せる實際の經驗を寫し、社會の現狀基督教徒の責任は慷慨淋漓たり。**徒然草に兼好と聞く**は兼好が、戀愛の人、深情の人、悲哀の人たるよしを述べて、澤々たる同情を寄せ、文中文を讀み、言外言を聞き、兼好をして微笑せしむ天知子得意の文也。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 329. OCTOBER 8th. 1892.

EDITORIAL:—The Prime-Minister

LEADING ARTICLE:—Virgin Purity. (Tōkoku.) Woodland Resources in Japan. (Saitō Otosaku.)

CRITICAL NOTES:—Etō Shinpei, the Hero. Ōishi Yoshiwo, the Leader of the 47 Ronins. "Shigakufukiu Zasshi."

MISCELLANEOUS:—Kenkō Hōshi in Tsurezuregusa. New Sonnets by B. B. The Great Forgetfulness of Humanity. The Social Condition and the Duty of the Christians.

FRAGMENTS:—

HERE AND THERE:—

本號(第三百廿九號)目次

○社説　王佐論○總理大臣

○論説　處女の純潔を論ず(富山洞伏姫の一側の觀察)透谷子○本邦森林安固の度(齋藤乙作)

○批評　南白遺稿と江藤新平○大石良雄○史學普及雜誌

○雜錄　徒然草に兼好法師を聞く(天知子)○近詠三首(米文卿)○人間の一大忘却(ふみ子)○社會の現狀、基督教徒の責任(山月子)

○片々　明治學院生○軍人救義會○青年學會○東北救世軍○同志社通信○宮城基督教青年會○英國の青年會

前週(第三百廿八號)赤表

●社説　世界婦人禁酒會頭の生母眠る。及其肖像

●講述　齒牙生理の大意(愛水生)

●小説　朝顏(菊地、御伽ぎ)手習屋の主人

●文藝　文學專門と云ふ事(みどり)○美人となる法○案山子の舍咏草

●雜錄　沙翁曲中の戀人(其二)○雨の夜(ひさご)○今とむかし(ふみ子)

●兒籃　吾宿の花(若松しづ子)

●家政　主婦の秘訣一則(ふみ子)○家兎の飼方○黄金の砂二つ三つ

●摘要　女學生の產兒力

●批評　保羅の傳(山月子)

●女報

●附錄　孤兒之友

前々週(第三百廿八號)白表

●社説　主動者の至誠○松平熊本縣知事

●雜錄　青年改革家に告ぐ(山月子)○片珠

●論説　心機妙變を論ず(透谷子)。○文覺上人の本領(天知子)

●小説　夏草(無名氏)

●批評　横井小楠○家庭雜誌○傳道師○早稻田文學の無韻非歌論を讀

●摘要

●片々

●附錄　總目錄

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百廿九號 明治二十五年十月八日發兌

社說

王佐論

支那廿二史中の人傑を貫ぬきて、兩種の大ひに異なりたる性情あり。

抑そも、政治上の正統權は何如にして生ずる乎。甲乙是非の比較は、暫らく學者に委ぬ。吾黨は閑寂として、茲に純理專門の研究を爲すものにあらず。然れども、試みに一國一部の歷史を繙ときて、之を通覽するものあらんには、彼の年代經過を以て正統權起生の一大主因となすの說を賛し、其恰かも好く事實に合する事を認めずんばあらず。

昔し、帝堯陶唐氏は、舜を擧て天下を讓る。舜亦之を夏の大禹に讓る。此時に當ては、天下極めて狹く、屬民太はだ多しとせず、加ふるに、堯舜、公平無私の量を以て只管らに蒼生の事を憂ひとせしかば、政府に正統權を握り世々之を子孫に傳ふるが如き必要及ひ願望はあらざりし也。

夏の代に入りて、系統相續ぐと十七世、歲を得ると四百五十有八年なり。此故に、王家既に舊く、帝權太はだ熱し、正統の運殆んど定まらんとせり。此に於てか、商王成湯、師を興して桀を伐ち、之を南巢に放つ。民望固より歸せりと雖ども亦非議するものなきにあらず。幾度か後世の人をして疑を挿さましめたるとありき。商、國號を改めて殷と云ふ、殷主凡そ二十八君、祀を得ると六百四十有四年なり。此時に當りては、正統の權大ひに熱し、正統の觀念深く人心に入れり。故に、紂王、九侯を醢にし、鄂侯を脯にし、比干を殺し、箕子を囚へ、民、塗炭に苦しむと雖ども、周發、之と牧野に會戰し、王をして鹿台に燔死せしむるに至つては、孤竹君の二子首陽山に隱れて餓死し、二代に生きざるの義を立つ。

周の代、三十七君、年を得ると八百七十有三年、正統の意義全く固結し、忠君の道略ぼ定まりたり。此故に、五霸ありと雖ども、親から王たると能はず、既に實權を握ると云へども名分を奪ふとを懼れたり。而して、孔子、出で丶春秋を著わし、王霸君臣の道いよ〳〵明らかに、正統の意義確定せり。

只だ、無文我意の一奇傑、秦の始皇帝は、造作なく東周を滅し、君を勝手に追遷したり。故に、漢高は沛に起り、亡命無頼の徒を率ひて之を伐つ、伐に討伐の名を得たりき。漢高一と度び、極に登り、劉氏、正統の祖となるや、たとひ王莽の奇才と雖ども遂に成す能はず、光武、儒者を率ひ、大義名分に乘つて、漢を再興す。

漢再たび衰ろへ、天下麻の如く亂るゝや、遂に三國を生ず。魏に曹氏あり、呉に孫氏あり、或は天利により、或は地利により、以て天下に號令するに足るものありと雖ども、万民未だ漢を忘れず、人傑未だ漢統を棄てざりき。故に、百世の英物孔明は、劉氏の末玄德にあらずんば出でず。一世の奇才荀彧はたゞ漢を匡さんが爲めに、曹操を助け、其僭妄を折きてのち毒を飲んで死しぬ。

之より以后、說くに際涯なし。朝あり夕あり以て乾坤一變せるが如く、天下、一治一亂するの際に、梟雄は正統權を打破して、自から奪略し、他の一種の英傑は、太はだ之を重んじて王種を推崇せんことを冀へるを見る可し。此の二種の性情、繩を綯へるが如く、相列んで廿二史を貫く。

孔明の才、一世に駕す、彼にして若し野心あらしめば、曹孟德、司馬仲達の望む所ろを望みて、而して之を遂ぐる更に容易なりしなる可し。然れども、彼は自ら許して云く、吾は王佐の才なりと。彼は毫も簒奪の意を有せざりき。曹操は、曹丕を生み、司馬懿は司馬師、司馬昭を生む、彼等皆な一世の梟雄にして、初より王權を覬覦す、彼等は奪はずんば遂に厭かざる也。

孔明云く、臣本と布衣、自から南陽に耕やし、性命を亂世に苟全し、聞達を諸侯に求めず、先帝臣が卑きを以て鄙陋とせず、自から枉げて臣を草蘆の中に三顧し、臣に諮るに當世の事を以てす、是に由りて感激し、遂に先帝に許すに馳驅を以てす、と。彼は、管仲に私淑し、桓公其人を佐けんことを願へり。而して、遂に劉備に會し、畢世の力量を擧盡して、王道の佐用を爲せり。

云く、王を佐くと。此の意何んぞ殊勝なる。人は、頭上に一物を戴かんことを欲す、執着忠勤は其慣性なり、登極究天は其安んずる所ろにあらず。神聖なる正統の君主を奉戴し、碎身折骨して、在ん限りの才能を傾むけ盡し、以て四民同胞を安

んぜば、經世濟民に於ける、丈夫の願望足れりと謂つ可し。誰か孔明出蘆の當時に同情を表せざらん。丈夫知己に命す、鞠躬盡力死して而して后ち已む、成敗利鈍に至りては、明の能く逆かじめ覩る所にあらざる也、と。

我國支那の史傳を學ぶと久し、其感化の人心に染むる深く且遠し。而も皇統連綿、百代一世、正系儼として侵す可らず。むかし一と度び平將門の邪暴ありたりと雖ども、爾來天朝を窺ふもの率土に一人だにあるとなし。支那の人才は二派に分屬すれども、我國の英傑はたゞ一派に流入す。力能あり、四方に志あるものは、たゞ王佐の用を爲すのみ也。何んぞ壯嚴なる。

然れども、我國亦た覇者ありき。妄りに帝權を推尊して、眞は、其實力を養ひ、表に人臣の忠を裝ほひて、裏に非望野志を懷く。藤原氏の下、代々の將軍、大率ね皆な是れなりき。

嗚呼、支那人傑の二性格、我國に入り、其眞情を流露せずして、其感化を布く。故に、若し仔細に考究し來れば、日本武士亦た判然として二派の流を分とあり。藤原の鎌足と道長と平の清盛と重盛と、藤房と尊氏と、家光と齊昭と、何んぞ其の判然として相別るゝとの明らかなるや。

德川氏中世以來、忠孝王覇の論人心に深入し、勤王忠君の活火漸やく熾んなり。水戸の義公、烈公は德川氏の副將なり、折燒柴、花月草紙の著者は、德川氏の良佐なり、然れども彼等皆な勤王の念に勃々たり。一と度び、蒲生君平、高山彥九郎、賴山陽等の氣節慷慨に激せられてより、此感滔々として海内に流れ、遂に維新の大業を盛り上げたり。

吾儕は維新創業の英傑に、純忠なる王佐の念熾んなりしとを疑はず。一と度び小楠の遺稿を讀み、亦た西鄉南洲の遺訓を誦せんものは、彼等が抱負する所ろの高潔にして且つ忠良なりしとを感ぜずばあらず。もし、松菊、甲東の施政の跡を尋ぬるものあらば、彼等が日夜に鞠躬して、王佐の任に負かざらんとを期したるの至誠に感動す可し。あゝ、維新の革命は、王佐の人が、簒奪の人を服從したる大戰勝也。

再來二十五年、小楠逝き、南洲逝き、松菊逝き、甲東逝きぬ、遺す所ろ、何人ぞ。副島伯、久しく台閣に立ず、山縣伯、文政に慣れず。夫れ、至誠純忠の情を以て、王佐の才を兼ぬるの人、現に何人ぞ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

惟ふに、立憲君主政躰は、眞誠王佐の才を用ゆるに尤とも美なる政方たり。世人往々薄閥を說く、然れども立憲君主の下に薄閥ある可きにあらず。今は藤氏の天下にあらず、今は源氏平氏德川氏の天下にあらず、我等が英聖文武皇帝陛下の天下なり。海内もし英物あり、衆望之に歸し、果して經世濟民の德と才とありとせば、陛下は之を招きて之に內閣の組織を命じ玉ふなる可し。何もの丶卑劣漢ぞ、薩長を以て、永久內閣の組織者たらざる可らずと云ふ。帝國憲法第四章に云く、國務各大臣は天皇を輔弼し、其責に任ず、と。天皇の命を奉じて大臣となり、天皇を輔弼して其責に任ずるものは、即はち王佐の臣なり。後來もし其人あらば、何人にても此佐王の大臣たるべし。あ丶、立憲君主政躰は、眞誠王佐の才をして尤とも容易に展用せしむるの政躰也。

眼を擧て見よ、耳を聳て丶聽け、海內四方の誠實なる同志諸友。君等その天職を奉じ、各自長ずる所ろの任を負ふは固より當に然るべし。但だ夫れ、志を經世に寄せ、濟民の政局に一身を献げんと欲するの人あらば、須からく先づ王佐の二字を胸中に刻むべし。至誠奉公の念全身に透徹し、忠勤勵行して帝權の擴張を祈り、鞠躬盡力焦思苦慮、一意蒼生を安んぜんヿを、懷ふ。如此くして一生を帝室と邦家との爲に致すヿを得ば、丈夫の本懷何ものか之に及ばん。苟くも、此決心と、此希望と、此の氣量となくして、政治界に入るものあらば、そは政治社會の日雇かせぎ也。吾黨の思ふ所ろと異なる。

つら〳〵考ふるに、日本現今の帝室に、王佐の人を要するヿ太はだ切なり。而して、政治界のもろ〳〵の若手の爲す所ろを見るに、高く望を此に懸けて、抱負の純眞高烈なるもの、至つて稀なり。今は、內閣に王佐の才德を要するのみならず、政治界の後進生にも、亦た尤とも此の修道を要する也。微恙未だ快然せず、心緒膠として轉た丶感激する所あり、退養孤窻の下に、王佐論を作る。

惣理大臣

政治家たらんヿを欲する青年諸君に告ぐ。諸君もし政治界に意あらば、先づ總理大臣たるヿを期圖す可し。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

政治界に二種の職務あり。即はち、政務を辨ずること、政事を案ずること是也。もし政務官たらんとせば、之れ一種の事務家たらんとする也、其人は事務家たるに必要なる學問を爲す可し。

但だ彼の政案の人となり、上み王を佐け、下も万民を安んじ、國權を張り、國力を増し、國民を進め、以て一國政治の全局を、修整善導せんとするものは、泰西眞とに謂ふ所ろの、ステーツメンの類たらずんばある可らず。ステーツメン即はち經世家は、今俗の所謂る政治家とは異なる。經世家は、先づ富貴利達の上に超然とし、權勢名譽の外に逍遙遊し、高く天意に則とりて、蒼生を懷ひ思ふの熱愛に滿ちざる可らず。其眼識は全局大躰に透通し、好く人を鑑し、勢機を察し、宏量至誠にして、人を容れ且つ人を動かさゞる可らず。其智識は諸學科に通じ、實用化應の才鋭敏にして、最新最益の進歩に趣味を懷かざる可らず。其の理想確固、信仰堅實にして、邦家を誘導するの前途を明認し、風雨雷電の中に磁針の方向を一定し、大胆にして小心、勇猛にして慧利ならざる可らず。夫れ、經世家は、大將軍なり、大丞相なり、國舟を遣るの大船將なり、國民を案内するの大先導者なり。苟くも、其器其量あらずんば、たとひ、万卷の書を讀み、古今の智識を總彙すとも何の効あることなし。然れども、其器其量は、之を養なつて得がたきにはあらず、たゞ今人の之を要望することの足らざるを憂ひとす。

故に、政界に意ありて、眞とに經世家たらんことを欲するものは、常に總理大臣たらんとするの志望を念頭を掛くべし。此志望ありて、初めて眼識擧り、胸量擴張し、胆慮沈着し、堂々として抱負自任の器宇を大ひにすることを得べし。苟くも然らず、局促として、八百圓を望み、四千圓を望み、輕薄無節操の人に使わるゝことを甘んずるが如くんば、寧しろ初よりステーツメンたらんことを望まざるを可とす。

思ふに、陛下の招きを蒙むり、新に内閣を組織するに至らん迄は、經世家たらんとするものゝ安身場は、夫れ新聞雜誌の主筆たるにある歟。直ちに、所思を實政に施こす能ずんば、之に文筆を役して、紙上に一理想國を造るに若かず。西諺に云く、丈夫、總理大臣たらずんば、ロンドン、タイムスの主筆たれと、是れ也。

論説

處女の純潔を論ず

（富山洞伏姫の一例の觀察）

透谷子

天地愛好すべき者多し、而して尤も愛好すべきは處女の純潔なるかな。もし黄金瑠璃眞珠を尊としとせば、處女の純潔は人界に於ける黄金瑠璃眞珠なり。もし人生を汚濁穢染の土とせば、處女の純潔は燈明の暗牢に向ふが如しと言はむ、もし世路を荊棘の埋むところとせば、處女の純潔は無害無痍にして荊中に點ずる百合花とや言はむ、われ語を極めて我が愛好するものを嘉賞せんとすれども人間の言語恐らくは此至寶を形容し盡くすこと能はざるべし。噫人生を厭惡するも厭惡せざるも誰か處女の純潔に遭ふて欣樂せざるものあらむ。

然れども我はわが文學の爲に苦しむこと久し。悲しくも我が文學の祖先は處女の純潔を尊とむことを知らず。徳川氏時代の戯作家は言へば更なり、古への歌人もまた彼の靈妙なる厭世思想家等も遂に處女の純潔を尊むに至らず、千載の孤客をして批評の筆硯に對して先づ血涙一滴たらしむ、嗚呼處女の純潔に對して端然として襟を正ふする作家遂に我が文界に望むべからざるか。

夫れ高尚なる戀愛は其源を無染無汚の純潔に置くなり。純潔より戀愛に進む時に至道に叶へる順序あり、然れども始めより純潔なきの戀愛は飄漾として浪に浮かるゝ肉愛なり、何の價直なく何の美觀なし。

わが國の文學史中に偉大なる理想家なしとは十指の差すところなり。近世のローマンサーなる曲亭馬琴に至りては批評家の月旦甚だ區々たり、われも今卒かに彼を論評する事を欲せず。細論は後日を期しつ、試みに彼が一代の傑作たる富山の奥の伏姫を觀察して見む。ロマンチック、アイデアリストとしての馬琴の一端は之を以て窺ひ知るを得んか。

わが美文學は宗教との縁甚だ深からず、別して徳川氏の美文學を以て然りとなす。俳道の達士桃青翁を除くの外玄奥なる宗教の趣味を知りたる者あらず、是あるは恐らく馬琴なるべし、然ども桃青と馬琴とは其方向を異にして佛教の玄奥に

入れり、もし桃青の佛教を一言の下に許するを得ば彼は入道したるなり、もし馬琴の佛教を一言の下に表はすことを得ば彼は知道なり、桃青は履踐し馬琴は觀念せり、桃青は宗教家の如くに佛道をその風流修行に應用したり、馬琴は哲學者の如くに佛道を其理想中に適用したり、桃青の佛道は不立文字にして馬琴の佛道は寧ろ小乘的なるべし。われは桃青を俳道の偉人として尊敬すると共に馬琴を文界の巨人として畏敬せざるを得ず。

輕浮剽逸なる戯作者流を壓倒して屹然思想界に聳立したる彼の偉功の如きは文學史家の大に注目すべきところあるべし。然れども是等の事凡てわが論題外なり、いで富山の洞に寂座し玉ふ伏姫を觀察せむ。

八犬傳一篇を縮めて、馬琴の作意に立還らば、彼はこの大著作を二本の角の上に置けり。其一はシバルリイと儒道との混合躰にして、他の一は彼の確信より成れる因果の理法あり。全篇の大骨子を彼の仁義八行の珠數に示したるは、極めて美くしく儒道と佛道とを錯綜せしめたるものなり。その結搆より言ふ時は第一緝は序巻なり、而して第二緝の第一巻は全篇の大發端にして其實は八犬傳一部の腦髓なり、伏姫の中に因果あり、伏姫の中に業報あり、伏姫の中に八犬傳あるなり、伏姫の後の諸巻は俗を喜ばすべき俠勇談あるのみ。

伏姫に對する八房は馬琴の創作にあらずと難ずるものもあれど、余はむしろ此を馬琴の功に歸するものなり。試みに八房を把りて撿察して見む。伏姫を觀るの順序に於て斯くするを至當と思へばなり。

八房の前世は、彼の金碗孝吉に誅せられたる奸婦玉梓なり。「伏姫は此形勢をつく〴〵と見給ひて、此犬誠に得度せり、怨むるもの丶後身ありとも既に佛果を得たらんには。云々」又た義實が自白の言に「かくてかの玉梓が、うらみはこ丶に嗛らず。八房の犬と生かはりて伏姫を將て深山邊に、隱れて親に物を思はせ。」云々。

然れば、馬琴の八房は玉梓の後身たること、佛説に據つて因果の理を示すものなること明瞭なり、然して、この八房をして伏姫を背ひ去るに至らしめたる原因は何ぞと問ふに、事成る時は、伏姫の婿にせんと言ひたる義實の一言なり。伏姫が父を諫めて賞罰は政の樞機なることを說き、一言は以て苟且

にすべからざるを言ひ、身を捐てゝ父の義を立てんとするに至りては、宛然たるシバルリイの美玉なり。爰に至りて伏姫の「運命」を形くりしもの二段階あり、その一は根本の因果にして佛說をその儘なり、而して其二は一種のコンペンセーションにして、一言の失言より起れるものとす。其二の者は蓋し哲學的觀念より來れるものなるべし。

馬琴を論ずるもの徒らに勸善懲惡を以て彼を責むるを知つて、彼の哲學的觀念の酬報說に論入せざる評家の爲に惜まざるを得ず。勸善懲惡主義は支那思想より入り來りたる小說の大本の主義なれば馬琴と雖是に感染せざるを得ざるは勢の然らしむる所なるが、馬琴の中には別に勸懲主義排斥論をして侵犯するを得ざらしむるもの〻存するあるなり。父義實の一言を誤らざらんとて、一身の破滅を甘んずるは、シバルリイの極めて美はしき玉なり、而して其の是を實行するに至りては海潮の干滿整然として理法の圓滿を描くに似たり。

伏姫の運命を形りしもの右の二者あるの外に、驚くべき配合の美と言ふべきは、八房の他の一側なり。彼は玉梓の悪靈を代表すると共に、佛說の所謂凡惱なるものを代表せり、この凡惱の人間に纏纍するの實象を縮めて之を伏姫と呼べる清淨無垢の女姫に加へたり。凡惱を見ること他の多くの作家が爲す如く惑溺癡迷の人物に加ふる事をせず。極めて無邪氣にして極めて清潔なる一處女に附き纏はしむ。惡魔の魅力を假用して高傑なる舞臺を溷穢する泰西作家の妙腕は即ち馬琴が八房の中にあり。始めは伏姫徐々として八房の後に從へり、後には八房伏姫を背にして飛鳥の如くに至れり、凡惱の人間を魅するの狀を寫す何ぞ一に斯の如く靈なる。輝武健馬に鞭ちて逐へども遂に及はず、凡惱の魔力何んぞ人間の及ぶところならんや。雲霧深く籠めて、山洞又た人力を以て達すべき道なし、輝武の眼には川一條なり、然れども靈界の幻想を以て曰へば川一條は人界と幻界との隔てなり。横ざまに推倒されて」以下の文章深く味ふべし。

役行者は蓋し「天命」の使者なるべし。是に就きて言ふべき事あれど本題を離るゝ事遠ければ玆には言はず、唯だ讀者と共に記臆すべきは伏姫が幼少の時に行者より得たる珠數の事なり。馬琴の深く因果の理法を信ずるや普通の作家の如く行

の奇跡を以て伏姫の業因を斷たしむることなく、却つて彼八行の珠玉を與へて、伏姫の運命の豫言者とならしめ指導者とあらしめたるもの、支那小説の古套とは言へ馬琴の妙筆にあらざれば斯の如き照應を得ること能はざらむ。

次に觀察すべきは富山洞なり。富山洞はいかなる種類の幻界なるべきや。

人間世界を因果轉輪の車の上に立つものとせば、富山は馬琴の想像中にありて因果の車の軸なり。因果の理法の盈滿を示したるものは富山洞のトラヂェディにして、富山はこの理法をあらはしたる舞臺なり。伏姫は世を捨てつ世に捨てられて此山に入れり。この山の眞相を言へば、一方に經文あり。一方に凡惱あり。一方に仙縁あり。一方に毒業あり。一方に無染あり。一方に無慾あり。一方に菩提あり。一方に畜生あり。表面を佛界なりとせば裡面は魔界なり。表面を魔界なりとすれば裡面は佛界なり。佛か魔か、魔か佛か、一なるが如く他なるが如く、紛錯亂綜いづれをいづれと定め難し。斯くの如くにして業因業果の全く盈滿するまでは、一箭の飛んで勢の盡くるまでは落ちざるが如きを示せり。これ幻界なり。權者の大方便と題するものは即ち所謂コンペンセイションの大法なるにあらずや。故に富山の洞を言ふ時は、馬琴の想像中に於て因果の理法をつゞめたる一幻界の外ならじ。

この幻界にかの妖犬に伴はれて入りぬる伏姫はいかに。山峽に伴はるゝ時の決心は身を妖犬に許せしなり。許せしとは雖ども肉腐を許せしにはあらず、誠心を許せしなり。との誠心は抛げて八房の首にかゝれり。渠もしこの誠心を會得すれば好し、然らざれば渠を一刀に刺殺さんとの覺悟あり。彼の感得せし水晶の珠數は掛て今なほ襟にあり、護身刀の袋の緒は常に解て右手に引着けたり、法華經八軸は暫らくも身邊を離れず而して大凡惱大業獸に向ふこと莫逆の朋友に對するが如し。誠心は非類にも許すべしとすれど、肉腐は堅く純潔を守りて畜生に許さず。一方には穢土穢物を嫌ひたまはざる佛の慈悲に似たるものあり、他方には餓鬼畜生の慾情と戰へる靈妙なる人類としての純潔あり。これ伏姫が洞に入りたる時の有様なり。

「又たある時は父母の御爲に。經の偈文を謄寫して。前なる河におし流し。春は花を手折て佛に手向奉り。秋は入る月に

嘯きて坐に西の天を戀めり」といふに至りては伏姫の心中既に大方の悲苦を擺脱して、澄清洗ふが如くになりたらむ。八房も亦た時に至りては、讀經の聲に耳を傾け。心を澄し欲を離れて只管姫上を眷慕するの情を斷ちぬ。更に進んで「仄歩山嶮しけれども蕨を首陽に折るの怨なく。岩窟に梅遲けれども嫁ぎて胡語を學ぶの悲しみなし」といふに至りては伏姫の心既に平滑になりて苦痛全く痊へ、眞如鏡面又た一物の存するなし。

然れども亦た凡惱の夢に驚かさるゝ事全く無きにあらず。

「有一日伏姫は硯に水を滴がんとて出て。石湧を掬ひ給ふに。横走せし止水に。うつる我影を見給へば。その體は人にして頭は正しく犬なりけり云々。

とありて、之より月水の絶たることを説けり。

こゝにも亦た因果の道法を隱微の中に示顯して至妙に達せり月水の絶たるは、仙童に訊ふまでもなく懷胎の徵なり。而してこの懷胎は八犬子を生む爲にあらずして、その實、宿因の滿潮を示したるものなり。これよりして強く張りたる弦は弛みはしめたるなり。その體は人にして其頭は犬なりと云ふは、即ち是れ宿因の絶頂に登りたるを指すにやあらむ。

更に進みて仙童に言はせたる豫言の中に」、今こそ八つの子を遺せり。八は則ち八房の八を象り。又法華經の卷の數なり」とあるに至りては。明らかに業と法との兩者の對峙して、伏姫に臨めるを示し、遂に其宿因よりして却つて八英雄を得るに至らしめたる禍福の理法益明らかなり。同じ筆意にて成れる文字この後にも見えたり、曰く「こは不思議や。と取なほして。とさまかうさま見給ふに數取りの球に顯はれたる如是畜生發菩提心の八の文字は跡もなく。いつの程にか仁義禮智忠信孝悌となりかはりて、いと鮮に讀まれたり」。

更に又た

やよ八房よ。わが言ふ事を能く聞けかし。よに幸なきもの二つあり。又幸あるものふたつあり。則ちわなみと汝なり。己れは國主の娘なれども義を重しとする故に畜生に伴はる、これこの身の不幸なり。しかれども穢し犯されず。ゆくりなくも世を遯れて自得の門に三寶の引接を希ひしかばけふ往生の素懷を遂げん。……………又只汝は畜生なれども國に大功あるをもて國主の息女を獲たり。人畜の道異にして。その欲を得遂げざれども耳に妙法の尊きを聽く。……………

……おなじ流れに身を投て共に彼岸に到れかし」

といふに到ては、平等無差利、遙かに人間を遁れて菩薩の心備はれり。誠心は隱すところなく八房に與へたり、而して不穢不犯、玲瓏たるチヤスチチイの處女、禍福の外に卓立し、運命の鐵柵を物ともせざるは實に、この馬琴の想見なり。

最後に護身刀を引抜て眞一文字に搔切たる時に、一朶の白氣閃めき出で、空に舞ひ上りたる八珠粲然として光明をはつに及びて「欲ばしやわが腹に物がましきはなかりけり。神の結びし腹帶も。疑ひも稍解けたれは心にかゝる雲もなし。」云々と云ふに至りては明らかに因果の結局をあらはして八房と伏姫との關係を閉ぢたり。

要するに伏姫は因果の運命にその生涯を献じたる者なり。因果は萬人に纒ひて悲苦を與ふるものなるに、萬人は其細羅を脱すること能はずして生死の巷に彷徨す、伏姫は自ら進んでこの大運命に一身を諾ねたるものなり。義は彼をこの大運命の囚獄に連れ行きたる囚吏なり、宿因は八房に代表せられて、彼を破滅に導きたるなり。破滅は又た幸福を里見の家に臨らせたるなり。凡て是等の錯綜せる哲理の外に、恍々としてこの大作を輝かすものこそあれ。そを何ぞと曰ふに、伏姫の純潔なり。始めより終りまでの純潔なり。その純潔の誠實は通じて非類の八房を成佛せしめしは尊ふとしと言ふも愚ろかなり。

わが伏姫を論ぜんと企てしは、その純潔を觀察するに止めんとせしなるに、圖らずも馬琴の哲學に入りて因果論等をほのめかすに至りぬ。淺學の身にして文學上の大問題に蹈入りたるは深く自ら恥づるところ。讀者もしこの心して讀まざれば或は我が精神に違はむことを恐る

本邦森林安固の度

左の一篇は社客齋藤乙作氏が演說の筆記なりとす。吾社、日本山林の事に慨憂するや久し、此の篇大ひに社見を發揮するが故に、掲げて四方同志の諸仁に示す。

私は本邦森林安固の度合に就て聊か計算したる結果を報告しようと思ひます然し其前に一言御清聽を煩はしたい事が御座ます、私は諸君と共に我國林業進歩發達を熱望する處の一人であります、是は林業の進歩發達が我國現今の積極的富國策

中最も有効なる者の一なりと信ずるが故即ち直接には巨額の財源を造り出して以て國家の收入を增殖し間接には水旱の害を去り氣候を調和し國土を保安し人畜の衞生を助けて以て巨額の損耗を減却する處あらずして二重の利益ある故であるとは諸君と同樣の考で御坐ります。

然るに私の熱望しまする所以は是れ丈の要素に留まりません尙ほ一の主要なる元素を含んで居るのであります、其一要素とは何であるかと申しまするに即ち此我邦林業の進歩發達によりて我國々民の氣風を一變したいと思ふ事であります、之は如何にも不思議なる事の樣ではありまするが決して不思議ではありません。

偖て國民の氣風と云ふものが其國の風土山川の狀況に深き關係を有して居りますることは諸君も承知せらるゝことと存ます此理は恰度沙漠に棲む獅子や駱駝などの砂色を爲し又此邊にては黑き熊紅色の鬼でも地極堀方氷雪の絕えざる地に往きますると全く雪白に變ずると云ふのと同樣で御座ります。

處で我日本の風土山川は何う云ふ有樣であるかと云ふに實に天然の秀麗天下に比なく地上の樂園世界の公園地と致しましても毫も恥つる處がないと申すことであります、私も左樣であると信じて居ります去れど又裏面より此國土の成立を仔細に考へて見まするに火山脈は全地の下に蔓延し居りまして稍やもすれば噴火し破裂し又地震の多いことは殆んど世界一の有樣で御座りまする國土の形狀は又如何であるかと申しまするに山岳は傾斜甚だ急で御座りまして稍やもすれば荒涼忽ち骨肉を露はしまする實に我日本の國は奈落の底地獄の上に建つて居る危き花園であると申さなければならんのであります。

彼の春の朝にも爛漫として人々を浮立たせたりし艷美なる櫻花は恰も我日本風土山川の代表者であらうと思ひます此美はしき櫻花は爛として一時に咲き揃ひまするが一たび雨に遇ひますれば忽ちに色を失ひ一度風に遇ひますれば直ちに散つて觀る影もありません我國人民は實に此土に住み此花を賞美し居る處の人民であります豈に其氣風の此土此花に類似せざるを得ませうか「爛として一時に開く而して一雨一風忽ちに散りて跡だにもなき」是れ實に我國民一般の氣風でありまする」凡そ種々の會種々の流行種々の事業等は其國民氣風の確かなる現象として見るべきものでありまするが然らば我國の會……流行……事業……等は果して如何なる有樣でありませうか其一興一廢の跡を顧まするなれば實に櫻花の一生と好一對であるといふことを御承知になるでありましよう。

試に今日世の中に人物と持て囃さるゝ處の人々を御覽なさい夫れは何ういふ人間であるかと云ふに多くは秀麗なる才子肌の人間であります即ち交際が上手御世辭が上手な處の人間であります又生嚙りの萬能を有し萬事を如才なく所理する處の人間であります又巧言令色に熟して輕辨佞辭而も殊更に硬直を裝ふ所の人間であります即ち今日は一般に彼樣なる只表面の取付ばかり宜しき處の人間を持て囃して以て才子なり人物なりと申して居りまする時代であります。

彼の西洋の櫻樹が果實大形にして味極めて美なるものは彼れは果實にのみ注意し其果實の美なるものゝみを撰擇して之を陶汰した處の結果で御座りまする又我國櫻樹の花瓣豔美にして百花の王と稱せらるゝに至りたるのは我れ其花のみを愛し常に眞花の良きものを稱贊したるの結果に外なりません今日我國民の人物に於ける好尙か既に前述る處の如しと致しますれば其結果なる第二の國民は果して如何なる氣風を有するでありませうか固より喋々呶々を俟たずして明なることであります。

又夫ればかりではありません昔時は鬱蒼たりし山岳の地今は赤濯々たるもの多くありまする常に山岳の肉剝がれ骨露はるゝを見つゝある處の人民は之が爲に如何なる感化を受くるでありませうか崩落又崩落瞬時も定まりなき此外界の間に生長する處の人民は之が爲に又如何なる自然淘汰を受くるでありましようか加ふるに山林荒敗の結果として洪水汎濫は年一年に增加しまする風害だとか旱害だとか疫疾の流行だとか磐梯山の爆發だとか濃美の震災だとか各地の大火だとか此等恐るべき酸鼻に耐へざるの天災地變は陸續年一年に其慘憺を逞ふ致しまする處からして人民は段々に殘酷慘憺の出來事に慣れまして追々大和民族特有なる溫良忠實の氣風を失ひ毫も此等災害の天の戒なるを覺りませず此等結果の綜合より致しまして今度は極く惡い處の狼の樣な獅子根性を加へて參りました夫れ故今日一般の人情を考へて見まするに只私利にのみ汲々として隙あらばかみ付かん斗りに致して居ります又不義に齷齪し卑偽汚行は至らざる處ありません彼の破廉恥だとか不道德だとかは世間普通の樣になりまして誰あつて之を怪むものがなく却て之を怪む處の人が世間から怪まるゝ樣な今日の有樣で御座ります若し夫れ今日にして之か救濟の策を講じませんならば今後の大和民族は果して如何なる境隅にまで墜落し沈淪するでありませうか。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

造物主が我國に實に數多き植物を賜ひ又速かに生長せしむる處の地味と氣候とを附與せられたるは決して偶然ではなかろうと思ひます即ち此危險なる國土を保安致しまして其土に棲息する國民氣風の墮落し沈淪せざらんとを企圖せられたるの感謝すべき深意であろうと信じます然るに國民の多くは毫も此感謝すへき神恩の難有きを思ひませず日前の小利に汲々して永遠の大利を忘れ果て數十年數百年の星霜を經るにあらざれば取返しのつきません處の財寶を惜氣もなく空く濫伐して少しも顧る處がありません然し神……愛する神は斯かる大罪をも咎め給はず先づ草を茂らして傷を包み種子を播き萌芽を生ぜしめて其回復を圖られまする。

然れど人民……此墮落せる多くの人民は尚ほ之を覺りませず斯く神の經營せらるゝ其後から刈り盡し燒き盡して尚ほ毫も顧みる處がありません而も實に必要ありてのみならず或は戯れに或は已が犯罪の跡を隱閉するとの爲にまで此暴逆を逞ふ致しまする實に是れ天に對し國家に對しての大罪人と申なければなりません。

而して斯かる暴逆の行ひ幾度となく重なりし處は神は如何に爲されたるかと云ふに今度は硬き篠竹を生ぜしめ刺ある薊藜を蔓らせまして此愚蒙殘酷なる人民に決して加害すへきものでないと教へられました然れども人民は此處に至るも尚ほ之に心付かず火を放て忽ちに之を燒き拂ひます而も幾度も繰返し／＼致しまする恰も是れ賽の河原に子供等の亡靈が石を積むのを鬼共が鐵棒にて打崩すのと一般實に停止する處がありません嗚呼天の父は斯かる愚蒙兒放蕩息子に向つて如何で懲戒する處なくしてなりましよう乎。

神は實に山岳の肉を剝き骨を露はして草木は勿論菅類をすら生ずるとの出來ない樣に爲されました又水源を涸らし河床を高め日照りを續けまして灌漑水利の便を絕たれたるのみならず屢々飲料水をすら奪はれて幾多の苦惱を與へられました加之ならず時としては大雨沛然として大海を決したるかの如くに降り續きまして忽ちに廣漠たる田園を荒らし數多の人類家畜を殺傷されました又氣候に變調を生せしめまして恐ろしき種々の惡疫を流行せしめ之が爲めに病み苦しみしもの死亡せるものも澤山に御座りまする是れ等は天父の實に忍ひさる處で御座りましようけれども一般の沈淪墮落滅亡を救はるゝ爲めには亦是非ない事であらうと思ひます是れ實に明治の初年より廿年頃までの景況で御座りまする、

然し放蕩息子たる墮落せる我國民の多數は斯かる慘憺たる御懲戒に預りましても尚ほ未だ悔ひ改むる處がありません其後天父は如何に爲されましたが諸君も御存の通り近來の天災地變は實に益々出でゝ益々酸鼻に耐へん次第であります先づ磐梯山の破烈を初めとし各地頻々たる洪水の汎濫より昨夏の震災今年各地の大火に至るまで實に手を盡し品を替へて水火の懲しめを斷行せられたのであります是れ豈に我帝國の沈淪墮落滅亡を救はるゝ爲めの御懲戒でなくして何でありましよう我國民若し今日にして悔ゆるとなければ今後は如何の懲罰を受くるでありませうか思つて此處に至りますれば酸鼻も亦足らざる次第で御座りまする。

教育だとか慈善だとか矯風だとかの事業は國民氣風の沈淪するを救ふに於て大なる効力あるとは勿論であります去れども若し其源に溯りて病根を退治しませんならば到底大勢に打勝つとは六かしかろうと申ます又此國民氣風の沈淪を救ひませんならば民力の救養も無益でありまする放蕩息子に金を與ふる何の益がありましようか陸海軍の擴張も何の効はありません支離輕佻烏の如き「イナゴ」の如き集合体が如何で國家を保安するに足りましようか立憲の政體自治の制度の如きも其完成を望みまするとは中々六かしいとたゞ思ひます條約改正し內地に雜居を許して直接生存競爭を爲さしむるとは亦甚た危いとではありませんか去れは今の政治家たるもの軍人たるもの矯風家たるもの慈善家たるもの又教育家たるものゝ總ては皆此國民氣風の沈淪を來たすの其病根を退治するの方策に就きて大に考究するの時機に迫れるを信し又若し此事に關して有効なる方策ありとせは萬事を拋ちても必らず先つ此事に助力し盡力せざる可らざるを信しまする然るに國民沈淪の病根は前演べました通り其の我邦森林の荒敗にあると既に明かでありますれば苟も國家を憂ふる士は其如何なる種類の人たるを問はす必我邦森林の愛を奬勵し我國林業の進歩發達を企圖せざるべからざるの責任あるものと信じます。

實に我國の森林にして見事整備するに至りますれば洪水疫疾旱害風害等は年年に減少致し澤々たる四國の景況は能く國民を感化し應化して溫良忠實の氣風を注ぎ込み天の父は放蕩息子の悔悟せるを好みして天災地變を治められましよう又た一方に於ては之と同時に巨額の損耗を減却し巨額の收入を增加する處からして自然富國の實も擧らなければなりません。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

林業の進歩の發達からして國民の有する利益は此の如くに廣且つ大で御座りまする而して其上にも尚ほ一の大なる利益は凡そ森林の事業は能く數十年數百年を期するものでありまする故に我國民として免かるべからさるの欠點たる彼の輕佻の風目前の考を去りまして自然に遠大の思想を養成することが出來まするとで御座ります。

要するに國民一般をして好んで森林事業を經營せしめ全國の山林肉落ち骨露はるゝの慘狀なきに至りますれば繊子根惰は取れて温良忠實の民となり才子肌は去りて剛膽忍耐の氣風養はれ有徳質實にして廉耻を重んずるの民族となるを明でありまする若し我國の大勢果して此の如きに向ひましたならば教育慈善矯風の事業は騎虎の勢を以て着々其効を現はすべく民力休養は期せずして實施せられ陸海軍の擴張は意の如くに實行せられ立憲の政躰自治の制度も自らに完成すべき對等の條約亦望まさるも出來るでありましよう實に林業の進歩の發達は國民に剛膽の氣風を與へまする艱難を忍び久しきに耐ふるの氣風を與へまする即ち一代で出來なければ子に讓りて出來なければ孫に讓り孫出來なければ四代も五代も經過して成就せしむると云ふ如き遠大碩固の思想を有せしめまする而して此等の氣風は我國民に於ては最も必要なるものでありまして又最も不足なる處の氣風で御座りまする斯く論し來りますれば我國に於て櫻花の爛熳なる處に梅花の香氣と松柏の節操とを調合したる完全に近き國民を造り出しまするとは決して企望すへからざるの企望ではなかろうと思ひます是れ私が我邦林業の進歩發達を今日の急務なりと信し尚ほ各種の志士が一致し奨勵企圖の勞を甘受せられんとを熱望するの一大要素で御座ります。

我邦林業の進歩發達は斯の如く必要であります然らば我國民一般をして好んで林業を經營せしむるの方法は如何すべきかと申まするに今日の有樣よりして私が考へまする處では森林事業は公供の上に於て一の大なる慈善事業である最も名譽なる且つ愉快なる事業であると云ふ事の外に森林事業は思ふよりは利益多き事業である實に安全無比の堅固なる事業であると云ふとを知らせるのが最も捷徑であらうと思ひます是れ私が本邦森林安固の度に就きて聊か研究しました處の理由で御座ります。

林業の利益に關するとを見まするには鈴木君も申されました通り我邦の人民は一般の農業をやつて居りますからして農業と比較するのが一番宜しう御座りまする今安固の度を申し上まする前に先づ通例の利益の比較は何れ位であるか之を一寸申し上ましよう。

今一町歩の地價金千百五十六圓で其實價が凡そ千圓位なりと云ふ田地に付きて其收支を申上けますれば其普通支出を差引きたる收入は一ケ年七十圓から八十圓位に過きませんそして其田地を耕作しまするに何程の人間が入用かと申しまするさ先づざつと三人で二百日掛からなければならない即ち凡そ六百人の手間を要しまする今其賃錢を極く廉く見積り自分賄で一日十錢宛と致しましても六百人でありまするから六十圓の賃錢を引去らなければなりません即ち千圓の資本を持つて一ケ年に高々十圓か廿圓位の純益しか無い即ち一分か二分の利息にしか當らんのであります。

之は土地を持つて居る者が自分で耕作する場合の計算でありまするが今度は其土地を借りて耕作する處のもの即ち小作人は何れ程の利益があるかと申しまするさ迚も利益處ではない其得る處のものを悉く勞力賃として勘定して見ましても自分賄で一日六錢何厘にしか當らんのであります即ち一日六錢何厘の賃錢を得んが爲めに風雨を冒し汗血を搾り星を戴て出で月を踏んで歸ると云ふ程に働て居りまする畢竟小作人は其利益の多くを地主の方に吸ひ取られて仕舞のです夫れ故地主は割合に一番餘計な利益を占むるのであります。

備て夫れならば地主には何れ丈けの利益があるかと申しまするさ年々小作米は滯なく納まるとし又氣候不順だとか旱魃だとか水害だとか其他風害とか蟲害とか云ふ樣なものは少々も無いものと見積りまして又臨時の入費例へば堤防を拵へるとか溝渠を浚渫するとか其他の臨時費も少しも無いものとして一番割良く計算して見ましても僅かに三分三厘の利息にしか當らんのであります然るに氣候不順であつたとか日照りであつたとか水害を蒙むつたとか風害蟲害に罹つたとか云ふて小作米の割引を嘆願さるゝのは殆んど毎年の樣に御座りまする又堤防改築だとか水害地砂除けだとか中年々餘分の出費も少くはありません夫れ故年々の純益を平均致しましたならば農業家中最も多く利益を占むる處の地主でも三分の純益は中々六け數からうと思ひます。

乃で日本の森林の利益は何の位あるかと申しまするに之は今日では殘念ながら未だ能く分りませんが吉野杉林などは六七分の利益に當りますそうであります今獨逸の農業地と日本の農業地との利益と比較して見まするに日本では大約獨逸の三倍の利益がある何故其樣に利益があるかと云ふに日本の農業は割合に細かに發達して居りまして土地を丁寧に使ふのも一原因又勞力賃の安いのも一原因ではありまするが地味と氣候との宜しいのが第一の主因で御座ります而して獨逸の森林は又何の位の利益があるかと申しまするど一番尠ないバイエルン國で三分一番多いサクセン國では殆んど其三倍餘り即ち一割程の利益がありまする若し日本の森林が農業地の通り獨逸の三倍の利益があるものと致しまするならば一割以上三割位の利益が上らなければならない夏し假に夫れ丈けは上らないと致しましても農業の利益より多いとは必然であると思ひます日本の森林も總躰平均致しましたならば一割の二割のと云ふ利には中々保證出來ません隨分中には運搬不便の處もあり又荒敗不毛の處も少なくありません故に平均しました處では何れ位の利子に當るか想像も出來ません然しながら民林として取扱ひまする場處は多くは地味も宜しく運搬の便も宜しい處ろで御座りまする夫れ故か若し取扱方に宜しく保護の方法も行屆きましたならば農地を所有して小作せしむるよりは比較的多額の利益を得ること確かであろうと思ひます況してや自ら耕作するもの又は小作するものに比しては其利益の多きこと幾倍の上に出でるでありましよう尚ほ此事に就きましては精査の上細かに報告致すことがあらうと存じます。

實に林業の利益は農業に勝るも決して劣ることなきは私の固く信ずる處であります又林業を經營することは農家種々の貯蓄法中最も行ひ易き良き方法だと思ひまする故に林業は農家の片手間に爲すには至極適當なる便利の事業であると存します。

然し今假に林業は農業より收益稍少なきと致しまするも尚ほ林業を經營するの得策なるを信ずるものであります利益少ない事業を營んで却て得策であるとは少しく不思議の樣でありまするがやはり決して不思議ではありません是れ本邦の森林事業は農業に比して非常に安固であるからであります安全で堅固な即ち間違の少ない事業であるかであります。

世の中で一般に利益の比較を致しまするには多くは此安固の度合に精しき考へを置きません即ち危險の償ひと云ふものを細かに差し引くことなしに比較するのが通例であります然しながら眞の純益を見ようと思ひまするよりは是非とも此危險の償ひを精細に差引かればならぬのであります是れ今日森林安固の度と農業と比較するの必要ある訳であります今便利の爲めに土地と生産物とに別ち別々に比較を致しましよう

第一農地と林地との比較

農地と林地との安固の度合を比較するには先づ其各の性質を決しなければなりません偖て農業地には如何なる性質が必要であるかと云へば先づ平坦でなければならない肥沃でなければならない行通便利でなければならない而して又水利に富める處でなければならない今此樣な性質を持て居る場所は實に何う云ふ所にあるかと申しまするに多くは河に沿ふたる處或は海岸に近き低い處であります即ち農業地と云ふものは常に以上の四要素に支配せらるゝものでありまする故に大抵は河川に沿ふ海灣に近い低き地に多きものであります。

又林地は何う云ふ性質を有するものかと申しまするに多くは傾斜の地であります瘠薄の地であります交通の不便なる地であります水利に乏しき地であります之は森林自ら好んで然るのではありませんが農業に追込まれて據なくそう云ふ土地を占むるのであります又斯あらればならぬのであります故に山林の位置は何う云ふ處であるかと考へて見まするど高き山岳の地即ち河川の源を爲す處の山岳の高地に多いのであります。

然らば彼の土地を損害するに第一の力を有する處の彼の洪水汎濫の害は農林何れの地に多きかと云ふに水は諸君も御存しの通り高きより低きに流れ下るものであります決して低きより高きに流れ登るものでありません然らば低うして河川海灣に近き處の農地は如何に此の害を蒙むることの多いでありましようか又高き山岳の地即ち河川の源を爲す處の林地は如何に此害に罹ることの少ないでありませうか是は別に辨明實證を要せずして明なることであります然し今森林地の水害面積と農地の水害面積とは何程の差違あるか其比例を知るには事實の統計が必要であります然るに山野の水害は少ない爲めか二十二年までは調査してありません故に今直接に林地と農地との水害面積を比較することは出來ませんけれ共今耕地と他の總ての地種即ち第一表の通りであります

第一表　（土地の水害面積比較）

明治	全面積 耕地	全面積 其他	土地水害面積 耕地	土地水害面積 其他	百町に付水害面積 耕地	百町に付水害面積 其他	水害面積割合比較 耕地	水害面積割合比較 其他
	町	町	町	町	町	町	町	町
十八年	四、五二六、八九五	三二、一七五、〇三二	四〇、五五四	一、六三九	〇、九〇	〇、〇〇五	一〇〇、〇〇	〇、五五
十九年	四、五四七、四四九	三二、一五四、四七八	二二、八四五	七、〇一八	〇、五〇	〇、〇二二	一〇〇、〇〇	四、三〇
二十年	四、六八四、七五九	三二、〇一七、一六八	五三、六九二	一、一三四	一、一五	〇、〇〇四	一〇〇、〇〇	〇、〇四
廿二年	五、〇二七、四九四	三一、六七四、四三三	一〇二、〇四五	三、八五五	二、〇三	〇、〇一二	一〇〇、〇〇	〇、六〇
平均	四、六九六、四四九	三二、〇〇五、二七八	五四、五三四	三、一六一	一、一七	〇、〇〇九	一〇〇、〇〇	〇、八〇

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此表に於て明治廿一年の闕けて居る故は此年は報告會の改正によりて調査なきが故であります今此比較表を見まするさ耕地の平均水害地は一分一厘七毛に當りまするけれども其他の水害面積は一毛にも當りません即ち耕地の平均水害面積の割合を百さ數しますれば其他の平均水害面積の割合は只〇八〇であります尚は之を分數にして現はしまするさ他の平均水害面積の割合は耕地の平均水害面積の百三十分の一しかありません即ち耕地の水害に於ける關係は他の地種に比して百三十倍だけの危險があるのであります。

而して山林胡原野地宅地荒地鹽田等の内何れが最も水害を蒙むると多いかさ云ふを無論宅地鹽田原野荒地等であります即ち山林地は此等地種の内にも最も水害の少ないものであります故に今山林地のみの水害を耕地に比較しましたならば百五十分一乃至二百分一位しかなかろうさ思ひます即ち山林地の水害に於ける割合はこれを耕地の水害に比較しましたならば百五十倍乃至二百倍も安全なのであります。

以上述べました水害の外土地に變化を來す處の作用は彼の地震ださか噴火ださか爆烈ださか云ふ處の即ち火の力でありまするが是れは甚だ稀なるもので別こ論究する程の影響なきものであります。

又土地の性質には毫も變化を來さヾるも他の關係より土地代價の下落する危險があります即はち器具機械の發明技術の進歩等より勞力を省き或は農藝の進歩によりて肥料を改良し又は貨物の運搬に便利を得て運賃を減少したる等の關係からして貨物の生産費を減しました時は其貨物若し農林産物の如き必需器である時は其價格は丁度減し得たる生産物丈けは下落するものであります而て此際若し生産費を減少するに止まりて生産力を增加しません場合でありましては別に生産高を增加するものにあらざるが故に其土地面積には變化を來すとなく從て小作料の數量は前日に比して毫も增減するとなかるべしさ雖も其價格の下落したるとによりて土地の利子さも申すべき地代金に減少を來たし從て其資格たる地價を下落致しまする又若し必需貨物の生産費を減少したる上に生産力をも增加したる時は其ものの產出高は多きに過きて供給の上に餘りを生ずべきか故に啻に價格の一層下落するに止まらず土地の範圍も減少致さなければなりません即ち增加したる生産力丈けを生産する土地は最劣等のものより放棄せられまする然る時は第一土地に餘りを生したるが爲めに其價直線に下落し第二增加せる生産物を以て以前仝樣の資本さ利益さを償はしむるが故に其生産物の價格も下落して又地價を減し第三小作料を定むる要處の最劣等の地以前より殘りしが爲めに或る土地さ最劣等地さ生産力の差は以前より減せざるを得す即ち小作料も減少しなければならず從て土地の利を減少するとさなりては地代を下落せしめまする即ち生産費を減少したる上に尚ほ生産力を增加したる場合には小作料は其價格さ質量さに於て共に大なる減少を來すが故に地價を下落せしむると實に大なるものであります。

今此の影響を蒙むるものは農地土地何れが大なりやさ申しまするさ勿論農地であります其故は林地は器具機械學力を使用するさも少くありまする又肥料の改良發明等學術の進歩に關係するとも甚だ少なくあります即ち林業は唯天然力を保護して行くに過きさるものでありまして彼の學理の進歩機械の改良等は林地生産物の生産入費を減少するに於て殆んど其効力を及ぼす能はざるものさ云ふても差支ありません然れさも農地に於きましては之に反して器具機械に直接の關係を有し勞力を要するとも多く又理化學の進歩發明するも大なる關係を有するものでありまする故に從て此危險も罹り易い別けであります。

又唯今申上けました關係さは丸で反對で今度は土地代價を騰貴するの現象がありまます此關係影響は密なれば密なる程多ければ多き程安固の度が高いのでありまする然るに農地は社會進歩し人口增殖するに從て漸々林地の最もよき部分を蠶食致しまする其面積は漸々增入するのみでありまする故に其地價の騰貴致しまするとは左程に多くありません然ながら林地に於きましては人口の增殖するに從て其最も優等なる土地より漸々農業に蠶食せられ又他に向ひましては決して浸蝕する能はざるものでありますれば其面積は年一年に縮小致し而も優等の部分から段々取られて行きまする故に漸々其生産力に遞減を來し到底社會の進歩さ共に增多する處の需用を充たすを出來ざるに至りまする夫れ故今日では殆んど價格なき尤下等の林地でありましても年を經るに從つて自然に相應の價格を生するに至るは尤も見易きの道理でありまする實に此點をのみ考へましても林地を所有するとよりも大に利益あり安全なるとを知られまする。

第二農産物さ林産物さの比較

農地に前既に述べました通り通例洪水の害に罹り易き危險の地に在りまする故此處に栽培する處の米麥蔬菜等の其害に罹ると多きは理の當に然るへき事で御座りまする又農産物は多くは草木類でありまして其性質は一般に弱くあります夫れ故に一朝水の害日照りの害暴風の害霜の害黴菌の害氣候不順の害等ありまする然は其影響を受くると實に鋭敏でなければなりません。

然るに林地でありまするさ先づ第一に水害の殆んど皆無同樣なる即ち農地に比すれば凡そ五十倍も二百倍も安全な處にありまする故に從て其生産物も水害を蒙むるこさは甚だ僅少なる筈でありまする加之のみならず林産物の主なるものは強大堅固なる樹木でありまする故に島渡の洪水なさに浸されましても損害を受くる樣なとはありません夫れ故に林産物の重なる害は火災風害蟲害でありまして其外枯損

（一三六六）

埋没雹害等を蒙むるとありましても其額は僅少に過きないものであります第二表は即ち此割合を比較したるものであります

第二表　（生産物被害比較）

類別		全收穫額	被害減量	百ニ付減量	被害割合比較
農産物		五三、七二二、〇五六石	四、五九一、一七五石	八、五八	一〇〇、〇〇
林産物	木	二四、五四一、六一七本	一、五五〇、二一七本	六、二八	七三、一四
	竹	四一六、五二二本	五、九二九本	一、四二	一六、五五
	計	二四、九五八、一三九本	一、五五六、一四六本	三、八五	四四、八七

前に林地と農地を比較致しました時は唯水害のみの比較ではありましたけれ共凡そ百五十分一乃至二百分一倍の損害しか無かつたか今度は割合に多い即ち殆んど中分に近い損害があります是れは何故斯く云ふ結果を示すかと申ますると農産物の方は容量で現はしてあります夫れ故に眞の損害の割合でありまするけれ共林産物の方は箇數にて現はしある故實は箇數丈の割合であつて容量即ち價格の割合でありません今普通伐る處の樹は何ふ云ふ木であるかと云ふに伐期に達してから伐るものであります故に多くは大木であります然るに被害の樹は何ふ云ふ木かと申しまするに概して若木が多い是れ若木は害を蒙むり易く且つ到る處に數が多いからであります即ち伐採木と被害木とは其箇數は同一なるも其容量材積に至りては大差なくばなりません即ち被害木の容量はずつと少なくなるのであります其の一の證據とでも云ふべきは竹の被害割合であります何故に竹の被害割合は樹木より少いかと云ふに竹は伐採するものも損害を受くるものも其各箇平均の容量が著るしい大差なき故であります今此理を推して考へて見まするど林産物の損害は農物に比して矢張り甚だ僅少なるものと存じまする。

又林産物の損害は啻に甚だ僅少であると思はるゝのみでなく其損害を受けましたものでも決して悉く無くなるのではありません其多くは矢張り遣に耐ゆるのであります即ち土の中に埋もれて仕舞つたか或は流失して仕舞つたとか云ふ僅少なるものゝ外は此多少用ゆるとが出來まするけれども農産物の方は損害を受けた丈けは殘らず減して仕舞ふのであります故に農産物の損害多き割合は一層甚だしきものと存じまする。

又林産物は明治十七年より廿三年に至る六年間の平均なれ共農産物は數年の統計を得さる爲め直ちに明治廿一年の分を用ひました然るに此廿一年の分は大抵平均を得て居るかと申しまするに其收獲高は前五け年の平均に對して凡そ五百萬石即ち一割五分程の増加あるのであります語を換へて申しますれば平年より二割五分丈け損害の少ない年であります故に若し眞の平均被害を用ひましたならば農産物の被害は尙ほ一割五分丈害増加しなければなりませぬのであります」即ち第二表に現れました林産物の損害は農産物の損害の殆んど二分一程もあると云ふとは全く間違であると云ふとを知られまするそして私は尙ほ之を確めまする爲に第三表を作つて見ました即ち農産物と林産物との被害面積の割合を比較した處の表であります

第三表　被害面積比較

類別		全面積	生産物被害面積	百町に付被害面積	被害面積割合比較
耕地		四、二八七、一七七町	二八、三二〇町	〇、〇六六〇町	一〇〇、〇〇町
林	山火災		二、九九五、	〇、〇四六	六、九〇
	其也		六六五、	〇、〇一〇	一、六〇
	計	六、五六五、二四〇	三、六六〇、	〇、〇五六	八、五〇

此表も林地は明治十七年より廿二年に至る六年間の平均を用ひましたけれども耕地は統計不充分にして數年の平均を取る能ざる所からして直ちに明治廿一年の分を用ひました然るに此年の作附反別は前五ヶ年平均に對して七万五千五百餘町歩の増加ありまする故か耕地平均の損害は前表の結果よりも尙ほ餘程増加しなければならぬのであります。

又此表に現はしました耕地は水田と麥圃のみを示し山林は官有の分のみを示しました是れ統計の都合已むを得ませんからで御座ります」今此表の比較を見まするど八割五厘しかありません生産物數量の比較では四割四分八厘七毛だけありましたものが……然し此が實に正確に幾分か近づいたのであります。

然るに此八分五厘の内火災が六分九厘丈け占めて居りまして而して此火災は今后大に減少するを得るの確かな見込があるのでありまする故に林業物の被害割合は農産物の百分一にも足りない樣になるとは近きにあるだろうと思ひます我邦森林

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は廢藩置縣以來大に其保護管理を怠りまして特に此火災の如きは山間の人民が面白い位に思つて居るものが多くあります夫れ故に春期地方に行つて見まするさ四方に延綿さして燒けて居るのが通例の樣であります又一昨年あたりまでは官報を開ひて山林に關するとを擇れて見まするさ其過半は山林火災の記事報告で埋もつて居りました。

第二第三表に現はれた處の結果は實に此無暗に燒いた時代の平均から出ましたものでありまする故に尙ほ一層減少すべきものであるを明かであります彼の獨逸バイエルン國の如き鐵道の飛火より生ずる處の新しき災害が大に增加して居りまするけれ共然れども四年間の平均を見まするさ只一毛の損害しか御座りません故に我國森林の如きも今後追々保護警察の周到なるさ共に人民も愛林の念を湧き起しましたならば其安固の度は今日に幾層倍するに至るべきや明かに希望し得らるゝとで御座りまする。

其他風害さか蟲害さか雪害などに至りましては保護の注意によりて多くは之を免かれ得るものさ存じます特に彼の被害中主因の一なる盜伐誤伐の如きに至りましては今日すら著しき減少を來しました今後又倍々著大なる減少あるとは固く信じ得るの理由があります。

要するに森林法律の束縛もなく保護の方法も至て不完全なるに加えて官民共に多くは目前の利に汲々致し毫も永遠の計を爲しませず又愛林の念もなく森林の貴重すべきとも知らざりし過去の林業に於きましても其地盤の損害は耕地の八厘にしか過ぎず生產物の損害面積亦八分五厘にしか過ぎざるの結果を見まする況んや今後相當の法律を規定し適宜の保護法を施行し人民は愛林の情起り森林の貴重すべきものたるを悟りまして以て國家永遠の計と爲すに至りましたならば今日の被害は尙ほ之を半減し更に尙ほ幾倍減じ得るやを知りません。

而して相當の法律を規定し適宜の保護法を施行するに至りまするのは熱心なる會員諸君の在るあり別に私の願ふまでもありませんが人民に愛林の情を注ぎ込み森林の貴重すべきを悟らしむるとは亦甚だ大切なるとさ信じまする故に私は深く諸君の此點に就ても切に御盡力下さるゝとを熱望するもので御座ります。

林業既に收利に於て少なからず安固の度は萬業無比なり而して間接には水旱の害を去り氣候を調和し國土を保安し人畜の衞生を助け特に浮華輕躁の人民をして醇順良の民たらしむる等國家公供の上に於て亦大に慈善恩惠の業たるを得られまする術も之を知り之を悟る處のもの誰か此事業に着手し熱心するを猶豫するものありましようか我邦林業の改革者たり母たり光たるの諸君願くは奮然益々此事を奬勵企圖し進んで我國民我國家の改革者たり母たり光たるの富榮を享受せられんとを。

批評

〇南白遺稿と江藤新平

故江藤新平氏の遺什を、其男、熊太郞、新作の二氏が纂輯したるものにて、此卷は其前編たり。蓋し新平君少壯の作にして、大率ね皆な轗軻不遇の時に成るもの也。故に「維新の機會に遭遇して、經國の策を展べ、時に、懷抱を詩歌に寄せて無量の感を吐きたるもの」は、皆後篇にあらんとす。後篇尤とも見るに價ひあるべしと雖ども、此篇の如き亦天眞爛熳として、渠が本色を現はし、寸蛇舌を吐く既に炎々たるの狀態を示す。

此一小册子によりて、試みに渠が人となりを畧評せんか。渠は

頗ぶる偉畧に富みたり

安政三年燈下讀書の餘暇に綴りたる、圖海策は、其廿三歲の時の畧あり。其一、形勢に云く、當今の勢にては、日本、彼等と戰へば勝つ可らざるの理五あり、其一は日本は大將軍愚人なりと、其他指摘する所々歷々として當る、而して唯だ其良策とするは、先づ當今の强國と和親を結び宇內の賢才を招

き其用を果さしめ軍艦を購ふて海戰を習練し通商を盛んにして國家を富すにありと、當時にありて微賤の一少年既に此の卓識を有す、感ずべきにあらずや、渠むかし神功皇后の偉跡を想ふて、今人の弱狹振はざるを歎じ、形勢を論ずるの事に至りて、決尾一言を吐く、噫衰へたる哉と。何等の氣慨ぞ。其北海道を拓くの策は、先づ魯士亞と界を定め置き、而して一時に火を全洲に放ちて大澤山河をして瞬時の間に萠發し惡獸毒蛇をして少暫の中に殲盡するにありとす。其の鎖國論を迂なりとして、開國を主張するは、通商交易によりて宇內を制御し、日本皇帝を奉じて六大洲の天皇たらんとするにありき。彼が其藩を脫したるは、當年の機會に乘じて、皇權を恢張し、主權を帝室に集めて各藩に號令し、海外との條約を京師にて締結し、大ひに六大洲に交際して以て日本を宇內に覇たらしめんとするにありき。而して、彼が、其藩主閑窓公に書を上まつり、屢ば之に勸めて上洛せしめんとしたるは、當時、薩長、外和內反、巨多の金を費ひやして、而も志士の心を得る能はず、初志既に緩み、大事を成すの元氣やゝ衰ろへたるを洞觀し、機に乘じて閑窓公を押立て、諸藩に號令して四方經略の偉策を行はんとするにありき。藩主の側年寄に與へて、藩主に說かしむるの書に云く、

十年以前太平の時にて候はゞ此議を不斷行相成兼候不都合も可有御坐候得共方今は如此時勢に相成候に付ては庸主の爲めには不幸にして英主の興榮興覇の爲には幸にて有之候

而して、藩主に大功を立てしめたる后の彼が腹中に云く、

大公（藩主）閣下御大功被爲在候儀を以て何の處にか相應の土地御手に入候樣の公命有之度

と。是純然四方經略の策にあらずや。彼は、亦た薩長に連絡して、立功に劣らざらんとを期し、藩主をして突然不意に義兵を擧げしめ、小倉城下を燒亡し、之を奪略せんとせり。之を奪略したるのちの彼が奇策は、

一軍艦を以て不意に唐津を襲ひ輕く引揚げ如此くする三四度ならば唐津狼狽援を近郡の諸藩に乞はん諸藩固志なし唐津を救へば先づ幕府に對して辭あり而して小倉は救ひ難きの勢あれば必らず唐津を救ふて小倉を顧みざらん

渠が立策大率ね如此し。彼少くして早く經策方略を好む、故に

其觀察極めて英敏なり

幕府征長の時に當り、彼は早く結末の光景を預察したり、云く、寄手は小笠原懿州の指揮にて、既に藝州の家老を幽し長の使者を捕へ敵をしていよ／＼固決せしむ、是れ方畧を失ひたるの第一、門司と馬關との要峽を取らざる、是れ方畧を失ひたるの第二、而して、長は既に薩と內約す、詰る所は、即ち幕府雖如强盛自潰の盛にて、薩長雖如持小後來終に强盛に相見申候、と。其人物評も亦面白し、中山大納言を評して、才明なれども、好利の失あり、正義一貫せず。大原三位を評して、正直剛强なれども、秀才智謀なし。姉小路を評して、才氣能辨あれども、輕易に失す。桂小五郞を評して、眞實にして隨分整りたる人なりと云ふ。彼は、其觀察の機敏なるをもて自から許しつらん、雜咏の詩に云く、

觀情與察機。英雄兩工夫。觀察生機變。克成天下圖。

渠は、既に觀情察機に長け、屢ば偉畧壯圖を立つ、而も、身微賤、年若少にして、人の用ゆるものなし、鬱勃たる壯志激して、玉音を發す。故に其詩の妙なるものは、

大抵鬱屈望遠の情なり。

對　月　歌（前半畧）

草庭佇立夜已深、悠々我胸青々衿、撫胸欲歌月照胸、攝衿欲舞影滿衿、照胸滿衿思益切、明月沈々漢西岑、月下般憂向誰發、所思佳人在吳越、温山高兮不可攀、謙海深兮不可涉、側身西望淚濕衣、幾時共語今夜月。

劍

吾有三尺劍、藏在寶匣裏、五年勉洗此、十年勉磨此、磨以奇異石、洗以清潔水、瑩乎氷霜質、光輝何凛森。銳利猶未試、抱持至于今、悲風吹林樾、悵然傷我心。

万延五月五日

亭々孤生柏、鬱々爲誰緊、淙々幽溪水、何日到天門。老驥久伏櫪、雄志千里存、烈士驚老至、悲歌慷慨頻。孔丘拭面歎、楠公別兒言、今古如合符、寂寞哲人魂。頑雲覆明月、可憐楚屈原、屈原此日死、欲弔向江濱。

彼れ有爲の才を抱きて、漕櫪の內に苦吟す。蓋し櫪中慘憺風に向つて嘶くものなり。此故に、彼は草蒙に伏したる英傑に同情を表するとあつく、隨つて彼は

人才登用を第一義とせり

彼が雜詠の詩に吟ずらく、

富國强兵策、成之在得人、欲張皇國勢、開鎖亦何詢。

彼が二十三才の時の招才の論に云く、

是故に周漢の業を成すも人才を擧ぐるにあり、宇内を併呑するも人才を擧るにあり、と。

故に彼が當時薩藩に重んずる所ろは、其の人才を擧用したるの一點にあり、幕府を輕んずるの主因は、其人才を登用せざるにあり、彼は、勢の趨向を大察するよりも、寧ろ人物の去就に掛念したり。左れば、彼が招才の偉策は、單に海内の英物を招くのみにあらず、「日本中は勿論、世界中の人才を招き集めて」夫々の長所を行はしめんとするにありき。

彼が才を愛すると、如此く切なり、然れども、彼は單に才を愛するのみならず、又氣節を重んじたり。思ふに、彼は世上普通に評するが如き誠意なきものにはあらざりき。彼の年少なるや、甚はだ楠公を慕ひたり、歌ふて云く、

臥思今世務、起讀古人書、慕彼楠中將、殺身護帝居

彼は亦た竹を愛し、其の君子の操あるを好めり、彼は亦た松を愛し、其歲寒にして彌よ凜節あるを重んぜり。雪は義の如く、花は勇の如し、然れども、之に仁の月を加へずんば、風景備はらずと云ふ。此般の言、尋常一般の騷客に倣ひたる陳套の論にはあらず。其攘夷鎖國を非とするの文に云く、

其事万一至誠の處分に無之、只だ一時の功名に出で、或は夷を憎むの激志より發し乍恐朝廷に於ても一時の快に乘じ天下形勢の歸着を御勘考無之候はゞ云々

彼が、名高き述懷の詩に云く、

才子不知義、義士才智粗、海内何以與、英雄泣窮途。

彼れ既に尋常ならぬ誠意を有し、且つ有骨の義氣あり、才思潮の湧くが如し、加ふるに、彼は當時新文物の尤とも流入したる佐賀藩内に人となりて、早く西洋海外の新空氣を吸ひ

大に新思想を有したり

彼が、魯士亞の形勢を說く所ろ、當時一汎の智識を以てせば、有數の高識なりと云ふべし。其招才を說くや云く、夫れ人才は天地の實にして万民の司命なり、其通商を說くや云く、人は天地の愛子なり、人は天地の至靈にして人君の至實なりと。凡そ此等の言、漢儒常格の言を繰反すものにあらず、既に西

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

津個人主義の說を味ひたるの言調を存す。

嗚呼、彼は實に一世の奇才なり、膽畧あり、經倫あり、義氣あり、文思あり。惜しひ哉、性急肝癖にして、持長忍强の德なく、温乎たる廣容の雅量を欠けり。加ふるに、武人の骨硬にして、理財に長ぜず、雄志勃々、忽然兵を擧て、一敗乍ち地に塗る。彼、大熊八太郎と一長一短す。もし彼にして八太郎の長所を兼有せば、甲戌の亂、彼の如く兒戲に類せざりしならん。彼が刑に就くや、一首を賦して吟ずらく、

國を思ふ人こそ知らめ大丈夫が
こゝろ筑紫の袖の波だを

餘音嫋々、今の英雄を惜む者をして涙泫然たらしむ。

○大石良雄

少年文學の第十二篇として、抱一庵主人が「大石良雄」出づ。添へて、一名、蓄積力と題し、專ぱら大石良雄が忍强持重の稟質を書く。もし、彼が長所を以て此一稟質にのみありとせば、未だ可ならず。彼は沈勇、果決、善謀、雅量、の諸德を存す。彼はもと非凡の質に、忠孝の學を加へ、文武を兼備し、日本武士の好摸型を造りたり。抱一庵亦た、此非凡の所を、遺憾なく、書き出して云く、

翌十九日、原惣右衛門、大石瀨左衛門、江戶より參着せり、茲に於て事の仔細、先づ大方は明かになれり。事の仔細の明かになると同時に藩中の混雜、騷動、狼狽はそも如何ばかりなりしとするぞ。猛夫は如何に激奮せるぞ、臆病者は如何に胸部の脈の高く打てるぞ、城中の光景の如何に慘憺たりしぞ、虛報誤聞の如何に到る所に囂々たりしぞ。而して家老大石は如何にせる。……流石に忠義の志に厚き渠なり、人知らざる時には、鬢髪の逆立てるともありしならむ、孤坐せる折には泣涙淋漓たりしともありしならむ。唯だ傍人は之を目睹する能はざるものなりしならむのみ。傍人は唯だ渠が着々事を處せる跡を見るのみ。

十八日の夜、渠は一室に閉こもりたり。十九日の朝は、悴主税に言ひきかせ、次に、母及妻に自己の身躰はなきものと覺悟せられよと告げ、次に、一家の事を悉皆整理し、書類を悉とく用簞笥に納め、婢僕に金子を分與し、出入の商人を召集めて一錢一厘の負債をも悉とく拂ひ、約束の未だ果さゞりしものは、運ばるゝ限り果し、止を得ざるものは書面にて斷は

り、又お庭作りの植木屋に手書を送りて、城庭の樹木に手入せしめ、又人夫二人を己が庭に入れて淸らかに掃除し、而して翌廿日、若黨雜兵を引連れ堂々として登城し、大評定を爲しぬ。

嗚呼是れ、渠が沈勇、雅量、を露出し、其非凡の英質を證明するが爲に遺憾なきものにあらずや。

抱一庵主人、もとより自から之を知れり、而して主人が此書著作に於ける用意の一點は別にあつて存す。主人は少年をして、空想に走り、過大に流れ、徒らに英雄を氣取ることなからしめんを欲し、之を導びき、之を勵ますに、尤も着實なる、尤とも無害なる道に由らんとせり、故に、主人は、大石良雄を以て、左して常人に異ならぬものとし、常人もし之を學ばば、必らず之に及ぶべしと、太はだ適當せる訓戒を以て少年を刺激したるも特に、大石が蓄積力を論ずる所以の主意盖し茲にあつて存す。此書の長所亦茲にあつて存す。吾黨は、著者が用意の親切なるを賛するもの也。

○史學普及雜誌

史學會雜誌、大八洲學會雜誌、維新史料、史海等、皆な學史専門の雜誌なるが、此度び、歴史を研究するに太はだ便利多き、今昔の連感を生ぜしむる多々なる西の都より、題號の如き一新雜誌出づ、月一回發行、廣池千九郎氏の編輯なり。初號には、業平を單なる色好み男と解して、之を愛國的慷慨家にあらずとするの辨、及び、重野安繹氏の、日本に封建の制なしの二篇あり。

雜録

近詠三首（社友）　米文卿

初秋夜坐

破壁夢殘多所思飛蛾撲燭竟何爲蕭庭竹影知誰畫吟草蟲聲是我詩君子固當安素位聖人能與世推移茅簷意味如相問不貧風淸月冷時

松陰繙易坐茅簷知了天心本益謙山上有山留秀出火頭重火避餘炎釋迦説法歸因果基督浮生喩食鹽文物古來皆教誨恩光如月照幽潜

壯士行

木屐褐衣傾濁酒街頭賣紙氣殊高素餐漫墓驕奢跡餔啜全忘耕稼勞盡日自雖誇放達如今誰復認英豪狂歌慷慨何爲者知否光明日本刀

自畵狸鼓腹圖

荒涼墓畔蕭條徑陰火明滅雨晦暝有人躡跚帶酒過不信此地有妖魔忽然巨僧高幾丈變爲小童矮於杖行人泰然曾不驚妖魔何知是靑盲變化術盡去鼓腹響音不似絲與竹行人佇立耑爾盲誰家醉客頻鼓盆其人生來好鼓吹狹腰短笛吹三四遠鐘忽驚歸路迢鼓吹共歇夜寂寥

徒然草に兼好を聞く

天知子

桐一葉浮世の外にひゞきけり』斯く口ずさみて庵の外を眺むれば、病後の氣力も秋聲一層爽快に聽こゆ、つら〳〵過去往く末を考へつ、萬沈み勝に物思はしげなるを心付かれてや、愛々しき妹は老質だちて徒然草を讀みて聞かす、其聲ふかく悲調を含みて、秋色いとゞ心泉に響く、思はず瞑目して靜聽すれば、天王寺の傍松林深く匂ふ所、一人の童と一人の弟子とに慰さめられつ、破壞の庵に世を觀じて蓆を織れる即ち顏なる瘠相の法師、端なくも浮動し來る。

余は此瘠相の法師兼好を觀察するの榮あらんと、思ひ立ちしと久しと雖ども、靈快の筆鋒に富める、兼好好きの一知友に約する所あるを以て敢て物せず、唯其情相の一片を秋色彩れる田舍の簷端に味ひしまゝ物す、若し落葉に異響を聽き得る人あらば己が望み足りなんかし。

伊賀なる國見山の麓、田奈保村に寂寞として睡れる、冷たき五尺の石あるを誰か知る、之れぞ是れ

　あるはなき世のならはしも忘られて
　　おくるゝ身には夢かとぞ思ふ

有は無なりと冷快冷笑するもいかで情愛の戀世をと、一佛徒にして佛道に疑問を懷き、言ふ可からざる悲哀に眞理を探りつゝ

　なき人のこの頃多き世やさらに
　　つねとしりてもおどろかれぬる

と病聲に苦吟しつゝ、觀應元年の昔し悄然と暗窟に入込みたる、左兵衛佐卜部兼好朝臣が永眠の墓標なりけり、試に深夜此墓標に神を凝らし、又は孤燈の下其遺墨に耳を澄せば、果して何かなる世音や胸に響くらん、何かなる精や心耳に聽こゆらん。　徒然草は即はち此田奈保の墓石に次ぎたる、兼好が第二の墓標なり、今川了俊は兼好の知友なりけん、從者伊與太郎と兼好の童命松丸とを其遺跡なる伊賀の草庵と吉田感神院とへ遣はし、壁より剝し箱より探ね、或は二條侍從より取集めて終に徒然草と歌集とを編みしといふ、崑玉集の此說をして若し誤なからしめば、余は此了俊が第二墓標の大檀那たるの恩を謝せずんばあらず。一度徒然草を繙く者あらば、其記事紛雜にして多數異種の人々が寄合書きの雜誌たりやと疑ふ者多かるべし、或は高遠の道を說き或は卑俗の稚談を述べ、忽ちにして世外の月を眺め忽ちにして俗世の區々に心配し、一行に嘲罵し、一行に警諭し、一頁に斷腸の悲哀を說けば次頁に抱腹の詼謔を逞ふす、未だ數頁ならずして笑ふ聲、怒る聲、罵る聲、嘲る聲、泣く聲、叱る聲、賞むる聲、慈け

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の聲、錯然として響き亘る、而して其中に一貫せる高音は道を説くの聲なるを知らん、兼好は實に此多數異種の人々を抱合せる如き徒然草たるの人なりき、徒然草は間違ひなき兼好なり、其多數異種の性質――寧ろ反對の如き多くの性質――は其多情多感の深刻なる所以にして、此多くの兼好はダマス――コの近邊愕くべき天光に擊たれたる結晶ポ――ロの如く、强大なる悲戀は終に一兼好に結晶せしめたるなり。

延慶の年栽戶の隅に怪鳥を射落して震襟を安んじ參らしたる北面武勇の猛士も兼好なり。後宇多天皇の時歌道の名士頓阿慶雲、淨辨、と共に和歌四天王と稱され權僧都の任命を辱するに至り而かも、水草も清き流れをたどる身は都といへど塵の世の中と、詠歌して之れを受けざりしも兼好なり。能筆の譽れたかく高師直に賴まれ、其母の追福に五十首を詠じたるを誤傳せられて、鹽谷の妻女に師直の戀文書きやりしと浮名謠はれしも兼好なり。伊賀權守橘成忠に知られて深く厚遇せられ、却て其女の中宮小辨が戀の奴と成り、しのぶ山また異方に道もがなふりぬる跡は人もこそ知れと、憶病風に追はれつゝ破戒色情の鬼躰を以て木曾に走りしも兼好なり。余は是等幾多の兼好に付て今論ずるを要せず、其人物は當時超然として群を抜き、至る所恩遇を受けざるなく愛好せられざるなく、後宇多院に殊遇の寵を受け、上皇亦典藥頭清元をして其病床を懇慰し、屢々辭するも倚米穀等を賜はらんとし、成忠の如きは其不義を憤りしにも係はらず、人物を惜しみて更に篤待せしが如き、其一種の愛嬌者たりしや、冥加者たりしや之れを知らずと雖ども、權僧都の官を賜ふを以て見るも、名利世界の人物たりしや知るべし、然ども今此等に付ても論ずるを要せざるなり、唯余が今見んと欲する所のものは、彼れが悲臉潸々たる人世の涙之れなり。

幽玄なる人物を兼好に見、趣味恍惚たる文を徒然草に見る所以のものは、一に悲戀に湧きたる人世の涙より凝結せしに出ずんば非ず、兼好は悲戀の凝集躰ならぬかは、彼は何かに世を寂寥たる原野と味ひつゝ、淋しき日暮し涙に思ひを遣りしやらん『蘭省の花時錦帳の下席山の雨夜草庵の内』と白氏の絶句を懷ろにし、榮華を悟りし草の庵に深夜一聲鴫の聲に耳欹だて――こしかたの世のうき事を數ふかも寐られぬ夜半の鴫のはねがき――彼れが半ば悔改めの胸中何かに苦ほしかりけん、寂世寂居に心核を擊たれて悔改めの眼覺むる時、苦悶せる人世の凄味之れに增す者やある――思ひたつ木曾のあさぎぬ淺くのみ染めてやむべき袖のいろかわ――是れぞ兼好をして兼好たらしめたる悲戀惱殺の悲涙なり、實に發心せしめ

し濃戀の聲にして其遁世は後宇多院の崩御にのみ因れるに非ざるや明けし、彼れは嬌激者とまで言はずとも、向ひが岡の僻物よと言はれ初めしは此涙よりなりき、花は盛りを見る物かは散りしをれたる庭などこそ見所多けれと風流の極致を極め、月花をばさのみ目にて見る者かはと情を極めし想念は實に此涙より產み爲せしなり、其――吾ればかり忘れず慕ふ心こそなれても人にならわざりけれ――と喞つに至ては其濃情殆んど人を呑むの感あり、其――思ひおく事ぞ此世に殘りける見ざらんあとの秋の夜の月――と歌ふに至ては其多情多念殆んど脂ぎりたる濃味に愕かざらんや、其悲哀は深く夢の世界をも愕かしけん、悲夢覺めて傍を見れば人なく、嘗ては臂を交へし面影さへ堪えやらず――さめぬれど談る友なき燈火の夢の涙に袖は濕れつゝ――其想念壯んにして――よもすがら雨も涙も降るものをなど歸りこぬ別なるらん――と情に殆んと死せんとしつ忽ちに思ひ返し――憂ことも暫しばかりの世の中をいくほど厭ふ吾身なるらん――と冷悟冷笑せんと勤む、然ども人世の眞味を一度味ひたる人がいかで暗黒中に僞笑して滿足するを得ん――ともすれば吾身一つに喞つかな人をわくべきうき世ならねど――と終に憂悶の中に一身を投じて『道を行ぜよ』と大唱するに至りぬ、而して花の散らんとする、月の虧けんとする、世事の不如意なる、人の不遇なる此忽微の境こそ人世幽玄の妙味にして無常なる所即ち常なりと悟る、之れ亦悲戀の產みたる大詩想たらずして何ぞ、其アービングたるゴールドスミスたる、其ユーモリストたるプロフェットたる、吾れ今日之れを知らず、知る所のもの唯其悲戀より吐出せる涙の法師のみ、不滿足なる悟道の冷氣が人間眞面目なる愛の熱氣に衝突して抱合せる一原分の人間を見たるのみ。

文を味はんとする者先づ情を知れ、情を知らんとする者先づ至愛を悟れ、至愛を悟らんとする者先づ悲戀を讀め、而して悲戀の涙を以て徒然草を讀め、然らずんば兼好微笑するの時なけん、豈無味淡泊器械的冷情の口舌を以て、此文豪の肺腑を講述し去るものならんや、余は此草紙の割合に冷遇せらるゝを悲しむ、實に悲しむ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○人間の一大忘却

ふみ子

抜山蓋世の英雄も、一瞥人を憐殺するの佳人も、遂に之れを、如何ともする克はざるものは、死なりけり。嗚呼死は人間最后の大敵なるかな。彼は最后の冠詞を襲れるにも拘らず、實に一日片時も、生物の傍を去ることなきなり。彼は何日何時其手を、生者の上に、加へむも知るべからずとは、如何に執拗き大敵なるか。若し人間は、生れたるが爲に、早晩死せずはならず、死せむが爲に、生れたるものならむには、凡ての生物中に於て、人間ほど苦しきものはあらざらむ。彼智情なき植物の如くなるか、左なくば親子朋友の關係をも解せざる動物なんどが如くならむには、死の悲も亦隨て少かるべきに、愁ひ相愛し、相慕ふことを知り、而して又畢世の事業を、企つることを爲す人間に取りては、死は實に、最慘刻を極むる敵なる哉。とは、永遠を知らず、甦を信ぜざるものにありては、當然生ずべきの觀念なりとす。夫故にこそ古より、生死の事に、思ひを及ぼしたる人は、一度は必苦悶し、失望し、遂に往々愛着の羈絆を斷ちて妻子と相別れ、跡を雲水に晦まして其死の心をば、安らかにせむとは謀りしなり、是實に基督の教を知らざるものにありては止むなきの事なりしならむ。

然るに彼世上滔々として勢利に赴き、營々として私慾に奔る徒を見よ。彼は實に死なる敵が、始終人間に、附纏ひ居ることを忘れたるに似たり。稀には其死なる敵が、早晩襲ひ來るべきことを知るが故に、短い憂き世に、果敢ない生命、どうせ死べきものならば、面白をかしう世を過さむとの誤想より、亂調に世を渡るものもあるべし。然れ共其多くは、死の人間の身に接近し居ることを忘れたるに外ならざらむ。是實に人間の一大忘却事件にはあらずや。余近頃病を得、一旦死に瀕したるが爲め、死生に關する問題に就き、始めて切實なる感想を有することはなれり。依て顧て健康なりし當時、嘗て企圖せし所の事を思へば、殆んど死なることは、豫期せずして、此賴なき肉体に、深く賴みを置きし事のみなりき。思へば何故に死なる敵は、始終身後に伴隨し居るものなることを、忘れてのみは暮しつる乎。今日にして之れを思へば、實に不可思議に堪ざるなり。依て世の健康に慣れて死を顧ざるの人の爲にもとて此感を記す。

○社會の現狀、基督教徒の責任

山月子

今日の事豈之を言ふに忍びんや、所謂紳士紳商は、腐敗の極に達せんとし、曲學阿世の學者は、前途有望の後進を誤まらんとし、追從佞俗の知事は、天眞愛すべき兒童の信仰を束縛せり、武道の何ものたるを知らずして、敢て漫に尙武主義教育を唱へ、基督教の一端をも辨へずして、敢て妄りに讒誣の筆を弄し、權者の鼻息を覗ひ、世俗の虛譽を求めて、是れ日も足らざる僞善的教育記者あり、甚には狂氣じみたる帶刀論を唱へし者あり、今又刺客論を出して、無法にも「刺客出でずんば今日を如何」とまで放言する者とへあり、醜事怪件紛然雜然として、吾人の目を掠め耳を撲つ、

嗟呼滔々たる俗物、確信なく沈勇なし、氣弱く膽小に、吹けば飛ばんとす、口に壯語し、擧動に强を粧ふ、誰か其心裏の空虛、卑劣、弱小なるを知らざらんや。

禍なる哉、僞善なる學者、記者、俗吏輩よ、爾曹果して正義の力を知れりや、現今の日本、義人無しと謂ふと勿れ、知らずや、腐敗の濁流は上帝の神力によりて、却て義人の心膓を洗ふて、益々皎潔清白ならしむることを、現時の日本は、未だ僞豫言者等の支配する所とならず、未だ憤りて刺客となるが如き、量狹く心局促たる人物を要せざるなり、要する所は唯だ眞正の改革者にあり、嗟呼三萬五千の基督教徒中、日本改革の眞英雄たる者、何れの處に在る、

輕んずると勿れ、汚すと勿れ。傲ると勿れ、慈愛正義の上帝は常に在せり、想ふ昔し上帝社會の腐敗に憤り、人民の苦痛を憫みて、前後幾多の改革者を出せることを、過去に之を出せり、現在に於て豈之を出さゞらんや、吾人自ら之を確信して我が同胞の之を確信せんことを望む、徒らに眼前の潮流のみを見て、反動し、失望する者の如きは、未だ以て邦家の大事を談ずるに足らざるなり、

此際吾人の最も屬望する所は基督教徒にあり、今日は宗派の區別、他人の妄評等をなすべき時に非ず、大に警醒奮起すべきの時なり、妄りに愛を説き新約を説きて、柔軟纎弱に陷ると勿れ、空しく義を説き舊約を説きて、疎暴虛喝に流るゝと勿れ、聖愛の中には必ず高義無かるべからず、高義を有する者、必ず愛の人たらずんばあらず、偏小なると勿れ、大膽なれ、宇宙を呑むの心あれ、空言せずして實言せよ、輕浮に行はずして眞實に行へ、信仰と望と愛、是れ爾の利器なり、以て不正、不法、不義、僞善を斬却せよ、討滅せよ、

パウロ嘗て藹然として曰く「兄弟よ我れ心に願ふ所と神に祈る所はイスラエルの救はれんこと也」と、吾人は基督教徒個々が、此心を有して日本精神的の改革を自任せんことを望むなり、視よ、基督ほど上に權を執れる者に柔順なる者あるか、基督ほど邦國を愛するの熱情盛なる者あるか、基督教を以て忠君愛國の敵となすが如き者は、視ても視ず、聽ても聽へざるの瞽者聾者のみ、吾人は此瞽者聾者を悟らしめざるべからず、吾人は四千万の同胞を濁流の中より救濟せざるべからず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

可愛子編

●明治學院生徒夏期傳道報告會　は九日二十六日午後二時より、芝白金明治學院に於て開かれたり。

●東京青年會々舘　は地を神田美土代町にトし、コンドル氏工事の監督をなし、清水會社の請負にて、目下工事中の由、費用は凡そ三万圓なりと聞く。

●軍人救義會　麻布龍土寺町にある同會は、軍人間に傳道の目的を以て組織せられたるものにして、目下軍人の信徒及び求道者凡そ四十名の會員あり、毎日曜日聖書の研究會を開き、府下の諸教師を聘して說教會を催しつゝあり、尙ほ同會は自今益々軍人間の傳道矯風の事業に盡力する趣にて、目下其方法を講究し、都合によりては、東京青年會と聯絡を通じ、青年會の支部となさんとの相談ある由。

●青年學會　三重縣紀伊國北牟婁郡二鄕村の同會は、竹内忠太郎氏等の發起にて地方風紀の矯正を計るを以て任とせり、其機關として學園てふ雜誌を發刊す。

●東北救世軍懇談會　九月十七日仙臺榴ヶ岡の梅屋敷にて、東北救世軍の懇談會を開きたり、會する者十八名、右は各地の景況を報告し、且朝鮮に巡遊せし嶋貫氏を慰勞せんが爲なり、酒井、髙野、木村、佐伯、松田、嶋貫、髙橋等諸氏の演說ありて、後英國救世軍の大將ブース氏が送り越せし書狀を讀む筈なりしも、時間なくして讀まずして散會せりとぞ。

●同志社通信

◎新教師及新入生徒の歡迎會は、去る九月二十日の夜を以て開會せられたり、小崎氏の歡迎辭に曰く「日本人速成を好むの心より謂へば兎に角、若し一旦泰西諸大學のとなどより觀じ來れば、同志社が設立以來十七年を經過したるが如きは、誠に未だ創業の時代をも過ぎ了せざる年處と謂ふべきのみ云々」森田久萬人氏の答辭に曰く「余先日鄕里熊本に歸て大に感ずる所あり、多くの青年は學問するを以て本讀みとなることと思へり、世智助になることなりと思へり、慷慨家となることと思へり、何ぞ知らん學生の本務は「人」となることにあるとを、余を迎ろ人が欲する所の歡迎辭は、君は漸く「人」に成りつゝあり玉へりと云える一語に過ぎたるはあらじ」と、同志社が新に迎へたる教師は、森田氏始め、入江懲之助氏、非上操氏印牧順作氏、麻生正造氏等凡て九人、新に入學せるもの凡て百八十人許なり。

◎九月二十五日の夜、夏期傳道者の報告會を開く、羽前酒田より漸く西して大坂神戶地方の報告に及び、二時間有餘に渡りて終ると能はず、其以西の地方は之を後日に讓りたり、之を要するに高く人生の運命を達觀し、脫然として塵外に一道の光明を認め、德高く識到り、眞に我同胞を思ふの熱情に滿ちたる一大眞傳道者の、我邦家に必要なるは、諸方の教勢民情が明かに余輩に告ろ所と思はる。

●宮城基督教青年會報告

◎本會は會員相互の信仰を奬勵し、友誼を厚くし、兼れて社會の弊風を矯正せんとの目的を以て、昨二十四年一月初週祈禱會の間に生れ出でたり、爾來一年有半微弱なりと雖、此目標に向て步を運べり、目下會員三十三名、今後一層の勇氣を以て活動濶步せんとは會員一般の切望なりとす。

九月二十四日は午後七時より、仙臺日本基督教會堂に於て例會を開く筈なりしが折節米國人サムエル、モリス、ジヨナサン、イー、ローヅの二氏、諸國漫遊の途次我國に立寄り、當地デフオレスト氏方に客たり、依て請ふに出席講演の事を以てしたるに、快く承諾せられたれば、之を公開の演說會となし、同日同刻同處に於て開會せり、司會者松田順平君開會の趣旨を述べ、併せて右兩紳士を紹介し、次でモリス、奥太一郞、ローヅの三氏熱心剴切に演說せられ、（モリス、ローヅ二氏の演說をば唐澤造酒氏通譯せり）最後に幹事鐸木近吉氏遠來の兩紳士に謝辭を陳じ、同會者の感謝を以て演說會を散じ、暫時會員の相談等ありて、全く閉會せるは九時半頃なり、傍聽人三百名に近し、因に記す右のモリス氏は金拾圓を本會に寄附せられたり。

●英國の青年會　は來る千八百九十四年に於て其設立第五十年期に相當せるを以て、其の創立者たるジヨージ、ウヰルリアムス氏は、同時此祝會に臨む爲め世界の各地より集り來れる人々に、青年會が是までに成就したる事業を見て滿足と奬勵を得せしめん爲め、此よりの二年間に於て特別に働き置くべきとの必要ある旨を勸告せられたり。

●オクスフオルド夏期學校に於ての講演　同校に於て、最も人の注意を惹たる講演を爲せしは、新約克のブラオン、ブリツグスの二教授にて、殊にブリツグス氏の如きは、其學問の自由の爲に戰ひし故を以て、之に同情を表せん爲め、其講壇に上るや滿堂足を踏鳴して喝采したりと云ふ、又閉校の際には同大學書籍館の爲に、各々幾干の醵金を爲し、之を校長フエヤベルン氏及び校員一同への謝辭と共に呈せし由。

毎土曜日發兌

東京經濟雜誌

第六百四十三號目錄

十月一日發兌

社說◎近世財政事情(續)◎時事新報の理財論◎佐久間貞一君に答ふ◎品川子選擧干渉を自白す◎近日の二不平旨(二)(替水漁史)◎管見一二一◎王代の漢文學(續)(鼎軒)◎北海道始末◎德川幕府蝦夷支配始末、北海道の經濟問題(續)(久松義典)◎寄書◎東京經濟雜誌第六百四十一號を讀む(佐久間貞一)◎複本位制と銀との關係(城山居士)◎責任内閣の本旨(二)◎雜報(數件)◎銀行及商業之景況(數件)◎官令(數件)◎定價一冊金七錢(市外郵稅五厘增)

東京市京橋區彌左衞門町七番地

經濟雜誌社

浪華女學校(舊稱大阪一致) 對 阿波松之助

小生儀本校の不動產受託の外教育上の關係無之候

家政要旨

村木經策君著

正價金五錢

郵稅金二錢

本書は明治女學校か「サンマー、スクール」を鎌倉に開きたる際、家政學を、生徒諸孃等に講述せしを筆記したるものにして他日幸福なる「ホーム」を作るの時に至りて益する所なくんばあらず因て共益する所一部少數の人に限るを憾み之を世上一般の姉妹諸孃に擴布せんと欲求て出版を企てたるものなり。

東京麴町區下六番町

女學雜誌社

在米日本人愛國同盟の機關「愛國」改良に就き

「愛國」改良の事は已に内國諸新聞に廣告し世人の照會を得る多きに至りし事なるが其改良期日につき八月廿六日發行の同新聞は左の社告を爲せり、以て同新聞か如何に改良を丁重にして愛讀者の高顧に酬ゐんとするかを諒し、倘ほ倍舊の愛顧を垂れよ

愛國紙上の社告

本社購入の本邦活字數十万既に到着致したるに付き本社は第一着に家屋を移轉し活版器械を据附け紙面に大改良を施すべし卓扳の論說、正確の記事、迅速の報道、印刷の鮮明必す讀者諸君に滿足を與ふる事を誓ふ、讀者請ふ少許の日時を假せ

千八百九十二年八月

發行所 米國桑港 第十九世紀新聞社

代價 一部金三錢 一ヶ月十五錢 三ヶ月四十五錢 凡て前金の事

愛國取次所 東京麻布飯倉片町 畑下熊野

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

福井

定價一枚壹錢五厘●一ヶ月貳十五錢●三ヶ月六十五錢●廣告料五號活字二十二字詰一行一日分二錢五厘●四號活字一行三錢●二號活字一行四錢●月曜日及大祭日翌日休刊

福福福福福
井井井井井

の用筆は森嚴にして立論は中正なり
の報道は迅速にして記事は確實なり
は官に媚びず民に阿らず正直行々如
は正を正とし邪を邪とし言論諤々然
の本領は一着眼世に高かき處に在り
の特色は一肚皮時に合ざる處に在り
は敎育衞生の思想を普及するに力む
は農工商業の發起を奬勵するに任ず
は斬新にして穠郁なる詩歌を採錄す
は豐腴にして典雅なる小說を掲載す

發行所 福井縣福井市佐佳枝中町五十一番地 福井社

女學雜誌社出版書

小供のはなし 全

定價金五錢
郵稅金貳錢

目次

第壹回 田舍音樂師
第貳回 菫の君
第三回 熊と旅人
第四回 風と日の喧嘩
第五回 ハイ〳〵トタミイマ
第六回 カンとクツドの話
第七回 王にも勝てる人々
第八回 母の愛
第九回 柔順なる娘
第十回 英雄の所業

東京市麹町區下六番町六番地 女學雜誌社

●青年學會會員募集●

會則及學園見本要郵券六錢

毎月二十五日一回定期刊行

學園 第參號

九月廿五日發行

◉定價郵稅共一部金六錢五厘
◉爲替振込局紀伊長嶋郵便局

本領――議論雄勁文章奇拔筆鋒鋭利萬丈の氣焰を吐き眼光爛々紙面に閃き精氣迸出活潑々地四隅に透徹す毅然嶄然一個獨特の活手腕大本領眞に是れ新日本青年界の曉鐘

特別寄書――敢て激烈悲憤の語なし而かも迂濶放縱の說を爲さず質實にして奇警懇切にして雄渾其說く所は社會の活機大勢其論ずる所は青衿子をして健全有爲なる繼續者たらしむるに在り眞に是れ新國民唯一の烽火臺

天籟――才華清麗陸離筆機流暢快活時に天眞爛熳の秀咏あり清雅高潔の絶吟あり或は淡快縹緲の俳句あり宛然龍躍り鳳舞ひ大珠小珠玉盤に落つるの奇觀を現出す眞に是れ神氣爽然天籟颯々

漫錄――時に慨し世を憂へ事に觸れ物に感じ發して痛絶快絶の鐵火文字となり放言直論鋭刄一閃迸ッて輕薄兒の膽を破り因循子の魂を奪ひ將た亦青年子の先導者となり好伴侶となり彼を警め此を勵まし一讀三嘆案を叩いて快哉を痛呼せしむ眞に是れ多血多感の熱腸餘瀝

史傳――幽窓の下に兀座して今古の英雄豪傑學者大家を片紙の中に集め其性行閲歴を知悉し一讀感發興起せしめ再讀自尊自信の念を惹起せしむ眞に是れ史傳の特色

群芳精華――辛酸厄窮孤檠寒壁讀書講學の餘効發して奇峭峻拔の雄篇眞率絶大の大文章を顯出す眞に是れ活青年の眞相躍々然

懸賞課題 ◉論文――平忠盛論 ◉正詩――夏夜（十月二十五日〆切）

發行所 三重縣紀伊國北牟婁郡二郷村青年學會內 學園社

理化學的應用

實効確證

一個十錢

●元祖色を白くする三能しやぼん

●抑も此の三能しやぼんは第一身躰の色を白し御顔等の艶を出し肌のしみ、にきび、そばかす、をとり御肌合を艶美ならしむと奇々妙々なり

○尚くはしき事は本能書にあり

東京銀坐一丁目

●發賣本舗 佐々木玄兵衛

電話番號四百七十二番

●各地ノ藥店並ニ小間物店ニ取次販賣セリ

●●酒を飲む人及其父兄妻君に告ぐ

●●諸大家の有効證明

●●官許

●禁酒進德飴

●五日分（酒量二合節減）四十錢

●十日分（酒量五合節減）七十錢

●廿日分（酒量一升節減）一圓廿錢

●酒は一種の強壯劑として其少量を用ふれば好し左れど兎角分量を過し易くして朋友の交誼を破り離別を促がし父子兄弟の愛情を損ひ或は青樓に登て目的を失ふの學生あり或は上官の命令に抗して免職さるゝの官吏あり或は主人の眼を眩まして放り出さるゝ番頭丁稚あり加之ならず最も貴とき**主の御名主の愛**を忘るゝの罪人あり或は路傍に醉ひ倒れ又は行人と喧譁口論をして警官の厄介物となり二日醉となりて翌日の職業を打捨て端ては家屋地面を賣拂ふの人となり終には酒毒のため不治の病魔に魅入られて可惜生命を縮むる等實に酒の社會を害し人々をして自滅せしむると枚擧するに遑あらざるなり恐れても又恐るべきは酒にこそ●此進德飴は何程酒好きの人にても服用の多少に依りて斷然飲酒を止め又は適宜に酒量を減ずる特効等なり●五日分を服用せば酒量二合を減じ又酒量五合以下の人は十日分を用ひ一升以上の人にも廿日分を引續き用ふれば斷然飲酒を止む●水飴に加藥せし者故飲み易く且つ頗る健胃の効あり●本人に知らせず飲ますと得べし●之を用ふれば身躰強健にして家業を勉め本務を大切に品行を正くして長壽を保ち家內睦じく交際を厚くして容易に目的を達する一大良藥なり●當市內は端書にて御注文次第持參致し端書代は御致し可申●地方は別に運送費十錢を添へ御送金次第御送達可返●爲替は京都今出川局宛郵券代用は一割增

京都市上京智惠光院通靑殿町上ル

京都禁酒會

横濱貿易新聞

の大改良

去七月十二日より紙面を擴張し**本紙四**商況**附錄四**大小**八頁**の新聞と爲し內外國に於ける**農商工業、貿易事情、海陸運輸金融事情等**一層詳細に報道し精確に論議し**日本實業の良友良保護者**たるの本領を全ふするは勿論**政治、法律、教育、兵制、文學、宗教等**の苟も實業に關係せるものは之を論じ之を報じ更に實業者を益すべき優美なる**實業的小說**內外紳士豪商の**逸事**實業上の**問答**內外國に於ける社會人事の**珍事、奇聞等**を網羅し實ある上に花を添へんとす殊に**横濱商況**は我貿易新聞の特有にして東京諸新聞より一日以上迅速且確實に報道すべし故に**實業家は是非見ざるべからざる必用的商事新聞**なり

●●新聞定價●●

一枚一錢五厘　一ヶ月三十錢　郵税十三錢
三ヶ月一圓廿九錢　半ヶ年二圓五十八錢

●●廣告料●●

廿二字詰	
一行一回	金十錢
二回以上	金九錢
七回以上	金八錢

紙上廣告

今や我國商業社會長足の大進歩を以て文明先進諸國の如く將に**廣告利用の時代に際し**賣らんとする者も買はんとする者も皆廣告に依り其仕拂ふ所の廣告料夥多なる者は以て其收入する所も從て多く、廣告の利に依らざるものは日々に衰頽すべし然り而して貿易新聞か**殊に秀でたるは**讀者中洒落や慰みに購讀する者一人もなく何れも皆紳士豪商にして貿易品製造家は勿論全國あらゆる製産家か**必要上より活目熟讀するものなれば**政治新聞や小說新聞の讀者とは大に異なる所あり故に業躰に依り廣告の効力あることは**廣大にして**他新聞に優る萬々なりとす大方諸君乞ふ試に一ヶ月以上掲載して其僞らざるを驗せ

横濱南仲通五丁目九十番地

横濱貿易新聞社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人著

再版
増補

文法口授　一名和文獨案内

（半紙判日本綴）

特別賣價　金拾二錢　郵便税　金二錢

目録

（一）文と云もの丶譯
（二）章句段節の譯
（三）文を作るは容易なる譯
（四）多く文を作るを善とする譯
（五）文を作る工夫の事
（六）草稿の譯幷に書方
（七）文を練磨する事
（八）文を作るに病癖ある事
（九）佳篇を作る法
（十）文を培養する法
（十一）種々の文例

東京麹町區下六番町　**女學雜誌社**

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ペーヂ
定價郵税共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なることなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すこととす。

全部十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一十
何をか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十四
女學及女子教育……五十
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本編纂……九十二
女禮と躰操……百
上躰操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君内助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

明治女學校出版　**女學雜誌社發賣**

來る廿一日發兌の**女學生第廿八號**には山月子が**中秋雜感**を掲載す、文平易なりと雖も、愛と誠と涙と血あり、或は山月皎々として獅子王巖角に吼ゆるの凄味あり、或は慘雨蕭々として杜鵑血に啼くの慨あり、或は群山起伏の間を拔きて、獨り不二峰の旭日に笑ふの趣あり、如今秋氣清爽、天地わけて嚴肅の際、信仰修錬の男女諸君が一讀あらんことを望む。

●一冊四錢●郵税五厘

東京下六番町　**女學雜誌社女學生部**

●●廣告●●

山口縣人　**滋谷つち**

右の者名を述道にかゝりて出京し**女學雜誌社、孤女學院、愛隣會**等に關係ありと吹聽し、又は所々を徘徊し種々なる演説を致居候得共、毛頭關係等無之ものに付、念の爲此段廣告致置候也

明治廿五年第八月　女學雜誌社内　**藤井米八郎**

近來所々を徘徊致し**孤女學院**の名義を喋々**路傍演説**など致し又は**寄附金募集**致し居る婦人有之候得共、孤女學院に於ては毛頭關係無之者に付、此段廣告致置候也

明治廿五年九月　女學雜誌社内　**孤兒の友**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

保險附風琴各種精製廉價販賣ス

麴町區三番町四番地

田中風琴製造所

風琴直シ御報知次第直ニ參上極廉價ニ修覆可仕候

看護婦派出廣告

看護婦入用の節は御依賴に應じ本會より派出致可申候
但し地方へも差出し申候●貧困者は無給の事

東京本所區森川町壹番地

慈善看護婦會

産婆生徒看病法講習生募集

産婆生徒看病法講習生募集左ノ如シ

○産婆生徒

人員　四十名
願出　來ル十月二十日限リ
試驗出頭　同二十四日午後一時
年齡　滿二十二年以上

○看病法講習生

人員　四十名給費生二十名自費生二十名
願出　來ル十月十五日限
試驗出頭　同二十日午後一時
年齡　給費生ハ滿二十三年以上三十五年以下ニシテ夫ナキ婦人但自費生ハ年齡ヲ問ハズ

右規則書入用ノモノハ申出ニ依リ交付スベシ

明治二十五年九月

醫科大學第一醫院

是迄女學雜誌並に書籍代金弊社巖本善治宛にて爲換御取組御遞送に相成候向きも有之候、右にては帳簿登記上其他に於て不便に御坐候に付何卒以後直に女學雜誌社宛にて爲替御取組御郵送被成下度候

女學雜誌社發送部

一書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事
一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

十册	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六册（半年）	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二册（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方講讀の分

六册	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三册（半年）	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六册（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一册 金六錢 郵税 金五厘

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金	拾錢
同	三回以上	一	割引
同	六回以上	二	割引

○十行以上一割引。二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部 注文を要し以上半頁毎に十部增と定む。

發行所

東京市麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三